
異空間戦記 救国の英雄たち

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異空間戦記 救国の英雄たち

【Nコード】

N1977D

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

異次元の世界に存在する旭日皇国。大国との戦争で滅ぼされようとしているその国に、別次元からの救世主が現れる。世間からの爪弾き者で編成された義勇航空隊であった。

戦いの始まり

俗に中央大陸と呼ばれる地の西の果てに、旭日皇国と言う小国があった。

国自体は小国ながら、石炭、ダイヤモンド、金、各種宝石といった地下資源が豊かなこの国は、それらを財源として繁栄を築いていた。狭いながら周辺海域の群島と併せて7000万近い人口を養えたのも、ひとえにこの財力があるがゆえであった。

しかし、東側に隣接するトルアン王国が、北の軍事帝国アルメディアの侵攻を受け併合されると、この国にも危機が迫った。

アルメディアはその圧倒的な軍事力で皇国に対して恫喝を幾度も行い、半植民地化の条約を飲むよう迫った。

しかし、時の皇帝都代はその条約締結を断固拒否した。

隣国トルアンでのアルメディアにおける暴政の情報が入ってきたからである。都代帝は幾度も外交努力による解決を図ったが、ついに交渉は決裂した。

皇国暦741年。12月8日、アルメディアは皇国に対して宣戦布告。150万と言う大軍で皇国に雪崩れ込んだ。

皇国陸軍は各地で地の利を生かして勇敢に反撃し、敵の侵攻を幾度も頓挫させたが、それも3ヶ月が限界で、圧倒的物量を誇るアルメディア軍は半年で皇国の北半分を占領した。

残りの南半分の占領、そして首都西京への敵の侵攻もはや時間の問題と思われていた。

そして、この日も皇国中央にあるとある村をアルメディア軍が襲っていた。

「逃げる！！」

敵が来るとの情報に、村人たちが一斉に逃げ始めた。

姫神真理奈もその中の一人だった。

「戦える者は銃を取れ！！その他の人間は隣村へ向かってとにかく逃げる！！」

村の長老が指揮を執り、村人たちはそれに従って逃げる。女子供老人ばかりの50人ほどの集団だ。彼女もその流れに入った。

村から逃げ出して30分もしないうちに、村の方から銃声が聞こえ、そしてさらに30分もすると、銃声は聞こえなくなつたが、村のほうからは黒い一筋の煙が上がっているのが見えた。

だが、逃げ出した村人たちに出来る事はただひたすら逃げる事だけであった。しかし、まもなく誰かが叫んだ。

「追手よ！！敵よ！！」

真理奈が振り向くと、馬に乗った兵隊が追いかけてくる。噂に聞

くアルメディアの装甲騎兵に違いない。

彼女たちは無我夢中で走り出したが、馬と人のスピードでは差がありすぎた。

あつという間に追いつかれ、そして虐殺が始まった。女子供老人関係なく敵は銃剣で刺し殺していく。

彼女にも矛先が向けられた。一騎が彼女へ向かって走ってくる。

それを見て、彼女は必死に走る、

「やられるもんか。」

虚勢を張ってみるが、それでどうにかなるわけではない。

あっという間に追いつかれ、しかも彼女は転んでしまった。そして立ち上がるうとする彼女に向かって銃剣が向けられた。

（やられる！！）

彼女がそう思ったとき。

ゴオオン！！

聞いたこともない音が辺り一面に響き渡った。

「な、何！？」

敵も味方もしばしその音に唖然となる。

30秒ほどした時、突如雲の間から何かが現れた。

「何だあれは！！」

敵の一人が叫んだ。

雲の間から現れたそれを最初彼女は鳥かと思った。しかし、鳥にしては大きすぎる。しかも、羽ばたいていないし信じられないスピードでこちらに迫ってくる。

その場で立ち尽くす真理奈。

だが、次の瞬間その物体の数箇所が光り、ドドドという普段聞きなれた猟銃の発射音を連続したような音が響きわたった。

その音が収まり、物体が上空を通り過ぎると、遠くにいた騎兵が倒れた。

「ば、馬鹿な！！」

騎兵が叫んだ。

突然の味方の死に怖気づいたのか、彼女を殺そうとした騎兵は仲間へ向かって走り始めた。

だが、再び降りてきたその物体の二回目の攻撃により、その騎兵も含む全ての敵がやられた。

真理奈を含む、生き残った村人たちには何がなんだかわからなか

った。しかし、一つだけわかったのは敵が全滅した事により自分たちは助かったことであつた。

30人ほどにまで減つた村人たちは再び隣村へと向かつて歩き始めた。

彼女がその物体が飛行機と言う未知の兵器であると知り、そしてこれが彼らの初陣であると知るのはこの次の日のことであつた。

真理奈がいた場所から南へ50km程行つた所に、それはあつた。

ただの草原にしか見えないその場所に、先ほど真理奈たちが見た飛行機が降りてきた。そう、ここは野戦飛行場だ。

降りてきた3機は、エンジンを止めると整備兵によつて急造の納屋風の格納庫へと引き込まれる。旧日本海軍機に似た濃い緑色に塗装され、胴体と翼には日本の国籍マークである赤い丸がペイントされていた。

格納庫に引き入れられると、搭乗員が風防を空け降りる。すると、機体を押していたツナギ姿の整備員が駆け寄る。

「高野少尉！到着お待ちしていました！！」

「こちらこそ、よろしく願ひします。」

飛行帽子を外した高野と呼ばれた男の容貌はどう見ても20前後の若者であった。一方、出迎えた整備員は40歳前後である。

「機銃を撃つたんですか？」

機銃口についた煤をみて整備員が言う。

「ああ、民間人を騎兵が襲っていたから。．．．しかし、まさか異次元で戦闘機に乗って戦争するとは思わなかったです。」

「それは私も同じです。でもまあ、富士の樹海で自殺するよりは良かったと思っています。」

「そりゃそうだ。」

そう言いあつて二人は笑った。

戦いの始まり（後書き）

御意見などお待ちしています。キャラやメカなどの意見もあつたらどうぞ。

なお、旭日皇国をはじめとする異世界国家の科学力は日露戦争前後のレベルと解釈していただきたい。

パイロットへの道

高野五十六がそのホームページに出会ったのは18歳の4月であつた。

彼はこの年の1月に両親と兄弟を事故で亡くし、叔父の家で世話になっていた。しかし、事故のショックで大学受験に失敗し、所謂浪人になっていた。もっとも、ショックから大学を再受験するかもまだ定まっていなかった。

彼にとっての唯一の楽しみはネットサーフィンであつたが、ただブラブラしているのも気が引けるので、最近は何か自分にあつたアルバイトがないか探していた。

そんな折見つけたある求人サイトの適合テストに、なにげなく彼は挑戦してみた。最初は年齢や身長、体重などを書き込む欄だった。そしてそれが終わるとアンケートのような欄になった。しかし、やっていく内に気付いた。

「軍事に興味はありますか？飛行機を操縦したいですか？なんか変な事ばっか聞いてくるな。」

不審に思っていたが、彼は次々とYESを押していった。実は彼の親の影響で大のミリタリーマニアだった。五十六という名も山本連合艦隊司令長官にあやかつてつけられた名だ。

そして最後の項目に進んだ。

「命を失う覚悟はありますか？」

彼はますますこのページを不審に思った。第一まずどのような職業であるのか、また給料も出来高制としか書いていなかった。

「まさか傭兵かヤクザの募集じゃないよな。」

などと言いつつ、彼は最後の項目もYESとした。今さら命を惜しんだってしょうがないとい軽く考えていた。

そしてその一週間後、彼の元に手紙が届いた。

「今日の深夜0時。東京港に来い?」

その手紙には採用通知と、その一文のみが記されていた。

彼は散々迷ったが、行ってみる事にした。やめたきゃ引き返せばいいのだ。

深夜叔父に内緒でこっそりと家を抜け出し東京港に向かった。0時、指定された埠頭に行くと、一人の男が立っていた。

「高野君かね?」

「はい。」

「付いてきたまえ。」

全身黒尽くめのその男は、ただそう言って歩き始めた。

「あの!」

慌てて声を掛ける。

「何かね？」

「僕まだやると決めたわけでは・・・」

「安心したまえ、まだやってもらうところかも知めたわけではない。とりあえず、ある物を見てもらってからだ。」

その言葉に、ますますおかしいと思う五十六。

（まさか、麻薬の運び屋とかやれって言っくんじゃ！？）

そんな考えが頭を巡る、だが、彼は不思議と恐怖という物を感じなかった。何故か自然とその男の後を追った。

100m程歩くと、一台の車が止まっていた。

「あれに乗りたまえ。ただし、乗ったら目隠しをしてもらう。」

そういうと男は目隠しを彼に渡した。

もし逃げ出すとしたらこの一瞬だっただろう。だが、彼は素直に従った。車に乗り込み、目隠しをした。

彼が乗り込むと同時に車が動き始めた。どこをどう走っているかはわからない。1時間ぐらい走って、ようやく止まった。

「目隠しを外して降りなさい。」

言われたとおりにした。車から降りると、そこにはもう一人別な男が立っていた。

スーツをピシッと着こなした、40代後半ぐらいの男だ。

「ようこそ。私があこのサイトの雇い主だ。今はわけあって本名は明かせん。だが君がここまで来てくれた事を歓迎するよ。」

男はにこやかに笑いながら握手してきた。

五十六は表情を変えず、確信を突いた。

「で、目隠ししてまで連れてきて何をしろって言うんです。まさかヤバイ仕事じゃないでしょうね？」

その言葉に、男は笑いながら言った。

「何、こちらで法を犯すような事ではない。君には飛行機を操縦してもらいたいんだ。」

「飛行機！！？？」

彼にとって、飛行機を操縦できるのは夢のまた夢と思っていた。飛行機を飛ばす上で必須である英語の素養があまりなかったからだ。

「あの、俺は大学も出ていないし、英語も出来ませんが。」

その言葉に、その男は再び笑った。

「それは関係ないことだ。付いて来なさい。君に乗ってもらう機体を紹介しよう。」

そこでようやく彼はきずいた、自分が山の中にいるのと、目の前に格納庫のような物があるのを。

とりあえず男に付いて行く。二人はそのまま格納庫の中に入った。

そして、そこで彼は息を飲んだ。そこにあったのは、緑色に塗られたレシプロ式の戦闘機だったからだ。

「これは・・・」

彼は記憶を探る。目の前の機体は液冷エンジン独特の尖った機首を持つている。ペイントは旧日本軍と同じで、濃い緑に胴体と翼の日の丸という典型的な物だった。しかし、彼の記憶にある日本の戦闘機とは違っていた。

「「飛燕」、いや違う。こいつはソ連のyakだ。」

彼の記憶が正しければそれは旧ソ連軍のyak9型戦闘機だった。

「そう、yakだ。もともと、エンジンはオリジナルとは違うし、その他も色々と手が加えてある。そして君にいずれ乗ってもらうかもしれない戦闘機だ。」

男は先ほどとは打って変わって、真剣な表情で彼に言った。

「えー!?!?」

パイロットへの道（後書き）

御意見などをお待ちしています。

神の路

「これに、俺が・・・」

「そうだ。給料は基本給で月給30万程度は出そうとおもっている。どうかね？」

飛行機に乗れて、月給30万ならそれなりの物だ。

（あぶない仕事かもしれない・・・けど。）

彼は少し迷ったが、決断した。

「やります。やらせてください。」

そう言うつと、男は笑顔満面で彼に握手してきた。

「ありがとう。では早速行こうか。」

男がいきなり言い出した。

「え！？どこへですか？」

「私が所有する島だ。我々は海鷲島と呼んでいる。おい！飛行機を準備してくれ！！」

男は外で待っている先ほど五十六を連れてきた男に声を掛けた。男が言ったわずか5分後には、別の格納庫から双発機が出され、エンジンが掛けられていた。

「さ、乗りたまえ。」

咂然とする五十六を乗せ、飛行機は飛び立った。

時刻は午前３時半だ。真つ暗闇の中、五十六を乗せた飛行機は飛んでいく。

機内では五十六は黙っていた。というよりも、もう一人の乗客である男は飛び立った途端眠り始めてしまい、話し相手がいなかったからだ。

夜が明ける頃には、既に飛行機は海上を飛んでいた。そして、時計の針が午前５時半を指す頃、一つの島が見えてきた。

「あれが海鷲島だ。」

男が窓の外を覗きながら言った。

その島はそこまで大きくはないが、かと言って小さくもなかった。島は西側に小高い山があり、それ以外は平地のようだ。真ん中には滑走路が一本走っている。

飛行機はその滑走路に着陸した。誘導路を進み、小さなコンクリート造りの建物の前で止まった。

「さ、降りたまえ。」

言われるまま五十六は飛行機から降りた。そしてそのまま建物の中に案内された。

「ようこそ海鷲島へ、歓迎するよ。そして遅ればせながら紹介させてもらおう。私の名は河口宗一だ。」

男、河口は自己紹介すると、五十六に椅子を勧めた。

「河口さん、早速ですが、単刀直入に聞きます。一体僕の仕事は何でしょうか？そもそもあなたは一体何者なのですか？」

五十六は今一番気になっていることを聞いた。

「ふむ。君の質問はもつともだ。では私の身分から話そう。私は表向き宝石商を営んでいる。」

「表向き？では裏で何かやっているんですか？」

その質問に、河口は笑って答えた。

「ハハハ。まあ、裏でも宝石商だな。詳しく説明するにはあることを説明しなくてはいけない。付いてきたまえ。」

またも五十六に促す河口。もつとも五十六には断る理由はないからついていく。

河口は建物のから出て車に彼と共に乗り込むと、飛行場から離れ、西側にある山へと向かう。

「一体何を見せてくれるのです？」

「付けばわかる。」

その後、5分もしないうちに山の裾野についた。そこにあつたのは、大きなトンネルのように空いた穴だった。

「これは？トンネルのようですが。」

しかし、ただのトンネルではなさそうだった。雰囲気からして何かこの世の物とは思えない物が漂っている。

「我々は神の路と呼んでいる。」

「神の路？」

二人は車から降りるとその穴に向かった。

近づいてみるとますます大きいのがわかる。これなら車なら入れそう。そして、入り口から中を覗いて五十六は気付いた。

「あれ？山の大きさに比べて随分と向こうまで延びていませんか？」

そう言うと、河口がニヤリと笑った。

「よく気付いた。実はな、この穴は異次元に続いているんだ。」

その言葉には、驚かずにはいられない。

「異次元！？」

素っ頓狂な声を上げる五十六。

「そうだ。まあ、簡単には信じられんだろうがな。」

そりゃそうだ。異次元なんてアニメや漫画の中の物だと思っていた。しかし、何故か五十六は疑う気に慣れなかった。それどころかこの穴に運命めいた物を感じてしまった。

「いや、信じますよ。」

「そうかね。まあいい。私の商売も、そして君にこれからやってもらう事も実はこの穴に関係がある。」

そして二人は再び飛行場に戻った。そこで朝食を取る。二人一緒に朝食のパンをばくつきながら、話を進めていく。

「それで、あの穴が異次元で繋がっているにしても、あなたの商売と俺が飛行機を操縦する事になんの関係があるんです？」

「うむ。まず、あの穴がどこに繋がっているか話さねばな。あの穴の先には異次元の旭日皇国という国に繋がっている。」

「旭日皇国？」

「そうだ。名前からしてこちらの日本に近いが、実際に国土の気候、言語等の文化はほぼ同じだ。しかし、違う所もある。まずこちらとは時間差にして100年ほど歴史が遅れている。また、島国でなく大陸の片隅にある。そして何よりも違うのは、金銀、ダイヤモンド等の地下資源が豊富な点だ。」

「じゃあ、あなたがこちらで売りさばいている宝石は!？」

五十六はようやく相手の商売に気付いた。

「そうだ。向こうの物だ。この穴を発見して100年。我が一族はそれを生業にしてきた。だが、今現在重大な問題が発生した。」

河口の表情が厳しくなる。

「旭日皇国が戦争状態となり、国の存続が危うくなった。」

そこで五十六はピント来た。

「じゃあ、もしかして俺に飛行機を操縦させるのは・・・」

「そうだ。向こうで戦闘機パイロットとして戦ってもらおう。」

神の路（後書き）

感想などをお待ちしています。

戦いの始まり

「やはり信じられないかな？こんな話。」

河口が苦笑いしながら言った。しかし、五十六は真剣な表情のまま返した。

「いいえ。今更何を言われても驚きませんよ。・・・しかし、新たな疑問が湧きます。」

「何かな？」

「飛行機をどうやって持つていくかです。さっき見た神の路の幅では飛行機を直接持つていくのは無理でしょ？分解していくんですか？」

ちゃんと図ったわけではないが、先ほど見た神の路の開口部はどうみてもトラックが通るのが精一杯に見えた。Y a k がいくら小型機といえど、全幅は8 mはある筈だ。

「良い質問だ。実は我々が持っている秘密は何も神の路だけではない。」

「というと？」

「君の言うとおり、神の路の大きさには限界がある。よって運べる物も制限される。それは我が一族にとっても大きな課題だった。そこで、これを克服できないか研究者を雇い、研究を重ねてきた。その結果だ。我々は向こうと行き来出来る装置の開発に成功した。」

さすがにそれには五十六も驚きだった。

「それはつまり、一種の次元移動マシンということですか？」

「マシンではない。良いかね、本来次元、つまり歴史は平行に流れている。それぞれの流れは決して交わる事がない。これが所謂パラレルワールドだ。だから神の路はこのパラレルワールド同士をつなぐ連絡路ということになる。」

この説明には五十六も納得できた。というよりは平行世界を使うことは、架空戦記ではある意味王道の考え方だったからだ。

「今雇っている研究者、飛島博士というのだが、彼は独自の理論を持っている。まあそのせいで学会から追放されてしまったそうだが、それを駆使して特殊な電磁波を起こすことによって向こうとの移動を可能にしたのだ。」

まるでSFの様な話だ。

「ではその電磁波を起こす装置を？」

「そうだ。既にこの島に設置が終わっている。後は向こうに送る飛行機や資材の準備を済ませるだけだ。」

どう移動するかはわかった。しかしまだ疑問はある。

「一体飛行機何機を送るつもりなんですか？」

「30機は欲しい所だが、君を含めてパイロットが3人しかおらん

からな。今ありとあらゆる方法を使って人材を集めておる。飛行機はさつき見せたロシア製のYakが5機に、アメリカ製のT6改造零戦4機を入手している。」

「計9機ですか。」

「そう言うことだ。」

そうして会話を続けているうちに、朝食は終わった。

「さ、行こう。君の教官を紹介せねばな。」

「はい。」

一体どんな人間が教官なのか五十六には気になった。

（鬼教官だったら嫌だな・・・）

と思いつつ、飛行場の片隅にある格納庫まで歩いていく。河口は格納庫に付属するようについた小さな詰め所に五十六を案内した。

河口が扉を開けると、中には椅子と机が2つあり、その内の一つに男が腰掛けていた。

「おい沢村君。君の生徒を連れてきたぞ。」

河口が声を掛けると、椅子に腰掛けていた男が立ち上がった。

「河口さん。その若いのですか？」

五十六を指差しながら、沢村と言われたその男が言った。見るからに体格が良さそうだ。もしかしたら退役自衛官かもしれないと思った。

「そうだ。」

そして沢村は五十六の側に近づいた。

「私が教官となる沢村だ。君の名前は？」

「高野五十六です。」

「ふん。連合艦隊司令長官みたいな名前だな。」

「ずばりその通りだった。」

「体格は十分なようだが、スポーツの経験は？」

「高校ではバレーボール部に所属していました。あと、昔少しだけですがグライダーの操縦をしたことがあります。」

「そうか・・・河口さんが連れてきたのだから視力などは大丈夫だろうな。よし。今日から3ヶ月間、しっかりがんばってもらうぞ。」

沢村が見事な敬礼をする。すぐに五十六も返礼する。

「はい。よろしく願います。」

「では付いて来い。」

その後五十六は沢村に格納庫を案内され、どこに何が置いてあるかを教えられた。さらに外へ出て飛行場を一周し、施設の位置なども教わる。

それが終わると飛行場から少し離れた場所にある宿舎に向かった。

宿舎は3、40人は楽々収容できそうな大きな建物だ。

「今の所はお前や整備員を含めても5人しかないがな。」

そう言つて沢村は笑った。そしてその食堂で昼食をとると、制服が支給された。

沢村が言うには、向こうでは義勇軍という組織で戦うために一応こう言うものも必要だそうだ。

今回支給されたのは制服と飛行服を2セットずつだ。制服も飛行服もほぼ旧海軍の物だった。どうやら現在も製造されているレプリカを流用したらしい。それら制服につけられている階級章は銀一本線だった。

「それは練習生の階級章だ。」

制服を貰い、それを着ると沢村が今後の予定について話した。それによると、明日からまず座学に入り、計器の読み方や天測の方法を習う。それと平行するようにシュミレーター訓練、初等飛行訓練、そして実物を使った高度飛行訓練に入るそうだ。

これらを3ヶ月で終わらせ、実戦に配備される予定だ。こうして彼の戦いは始まった。

戦いの始まり（後書き）

御意見などをお待ちしています。

いざ。戦空へ！！

海鷲島での訓練は厳しかった。まず座学。さすがに英語の取得はなかったが、天測をするための航法訓練。計器やエンジンに関する知識や簡単な整備が出来る程度の知識も覚えなければいけなかった。また、天候に関する物や、戦闘時の対応の仕方など、実戦に即した物もあった。

体力面でも鉄球に入ってグルグル回るや平均台の上を歩くなどの、平衡感覚を養う訓練が行われた。

こうした基礎訓練が凡そ2週間ほど続き、そこからはシミュレーターを使った模擬操縦訓練に入った。

そうした課題を一つ一つ、五十六はクリアしていき、ついに訓練開始一ヶ月目で念願の飛行訓練に入った。

訓練機はセスナ機であった。もともと才能があつたのか、それとも運が良かったのかはわからなかったが、彼は短期間で飛行技術を習得していった。そのため、飛行訓練をはじめて2週間もすると、セスナ機の操縦に物足りなさを感じた。

それを教官の沢村に言ってみた。しかし。

「ジェット機に乗るわけではないから今はこれで充分だ。基礎を積みむことも重要だ。」

と沢村教官は笑いながら言った。

それまでに、新たに2人のパイロットと3人のパイロット候補が加わった。ただし、新しい練習生たちは五十六とは一ヶ月遅れであったため、彼らと共に訓練をすることはなく、専ら沢村とのマンツーマンの訓練が続いた。

訓練の間に、五十六は彼に関する情報を幾つか入手していた。

彼の年齢は32歳。どうやら元は航空自衛隊で戦闘機のパイロットとして働いていたようだが、何か訳があつて除隊し、河口にスカウトされたらしい。その理由が何であるかまでは、まだ五十六にもわからなかった。

一方、河口が言っていたもう一人のパイロットと会ったのもこのころである。

もうひとりのパイロットは既に白髪が目立ち始めた50代後半の男であった。男の名は藤沢といった。もと海上自衛隊員で、長い間対潜哨戒機P3Cのパイロットをしていたベテランだった。彼もまた、どうしてこの組織に加わったのかはわからなかった。

そして、新たに加わったのはパイロットだけではなかった。2人の整備員も加わっている。

一人は畑という50代の男で、話によると友人の作った借金の連帯保証人になって多重債務を抱えてしまい、富士の樹海で自殺しようとして彷徨っていた所を河口に拾われたという事だ。元の仕事は自動車整備工だ。

もう一人は、落合という30代前半ぐらいの女性で、彼女も技術系の大学を出たが、職が無かったことからスカウトされたらしい。

「家の隊員は皆訳あり人間だ。」

後に沢村が言った言葉だが、五十六には全くそのとおりだと思った。何故ならその後もちよくちよく補充されてくる人間も同様に何か訳があった。借金から逃げるため、リストラされたため、妻に先立たれたためという者もいた。

五十六が島に来てから3ヶ月目には、パイロットが練習生含め13名、整備員が10名にまで増えていた。もちろん、これでも不足だから河口はスカウトを続けているという。

その頃には、五十六の飛行時間は120時間に達し、練習機から実機に移しての本格的な訓練に移った。

使用機材は最初に見せられたyak9型戦闘機である。

この機体は第二次大戦中のソ連戦闘機の代名詞と言える機体である。五十六たちが乗るのは、ソ連崩壊後に地方の工場で部品が見つかり、アクロバットやエアショー用に再生産された物だ。そのため、エンジンはアメリカ製のアリソンエンジンに改修されていた。

この機体をどうやって手に入れたか知らないが、河口は5機入手していた。しかも完全武装つきで。その全てが船便で海鷲島に持ち込まれた。

さらに、それに前後してT6改造零戦も運び込まれた。

T6とは米国で第二次大戦前に開発された練習機であるが、操縦のし易さ、加えて簡易な改修で武装できる事から様々な国で重宝さ

れた。

そして、1970年製作の映画「トラ・トラ・トラ」では零戦と似ているという事で、単座化等の改修を加えられて、零戦として大活躍した。映画撮影後もエアショーや別の映画で零戦役として活躍している。

河口はこの機体も6機入手していた。もちろん、武装付きである。

相手が日露戦争時代の装備なら、これらに対抗できる物はない。しかし、もし戦場に出るなら飛行機は消耗品として考えなければいけない。事故などで失われる機体が出るはずだ。とてもじゃないが11機では心許ない。

ミリタリーオタクの五十六にはそれが良くわかっていた。

それを、五十六は島を訪れた河口に言ってみたことがあった。その質問に対し、河口は渋い顔をして言った。

「飛島博士が異次元移動装置を改良すれば、タイムマシーンとしても使えるようになると言っている。そうすれば、過去からじゃんじやん持つて来れるんだが……」

この言葉を聞いて、五十六はあまり期待しないでおこうと思った。

そんなこんなの中に、五十六が島に来てから3ヶ月が過ぎた。

すでに飛行時間は200時間に迫ろうとしていた。既に簡単な洋上飛行や夜間飛行も出来るようになっていた。ただし、それでもかつての帝国海軍のパイロットの飛行時間から比べれば短い。旧海軍

では1000時間飛ばなければ一人前とは認められなかったからだ。しかし、沢村は「対地攻撃なら十分出来る。」と太鼓判を押していた。

そして、ついに運命の日が来た。その日、五十六は沢村、そして藤沢と共に河口の下へと呼び出された。

運命の離陸

「出撃してもらう日が決まった。」

五十六たちの前で、河口は静かに言った。

「それはいつですか？」

沢村が訊ねる。

「3日後だ。」

五十六は、いよいよ来るべき物が来たと思った。

その後、計画の詳細が話された。予定では、彼ら3人はy a kで一端飛び上がる。そして、海鷲島に設けられた次元転移装置を使って別次元へと向かう。向こうでは既に神の路を通って派遣された基地設営班と整備兵が特設の飛行場を設置しており、彼らはその飛行場の西50km地点に出ることとなっていた。そこからは、飛行場からのビーコンを頼りにして飛ぶ。

「計画は以上の通りだ。なお、向こうの詳細情報については各自に渡すファイルにとじてあるから良く目を通して置いてくれ。それと、向こうでの司令官代理は沢村君にやってもらうが良いかな？」

河口が五十六と藤沢に聞いてきた。

「異議なし。」

「右に同じです。」

こうして、沢村の仮司令官就任が決まり、3人は解散した。

五十六は自室に戻ると、渡されたファイルに目を通した。ファイルの中には、向こうの世界の状況が事細かに記されていた。五十六はそれらを即興で頭に叩き込んだ。

そして翌日には、新しい制服と飛行服が渡された。むこうで彼らは旭日皇国に加わって戦うこととなっているが、そのためには軍事組織としての体裁をまがりなりにも整えておく必要があった。むこうの軍隊に組み入れられてはたまらないからだ。

階級章や飛行服は旧日本帝国海軍に準じた物を使うこととなった。五十六の階級は飛曹長（准尉）だった。

ちなみに司令官を兼ねる沢村は大佐。藤沢は少佐に任命された。五十六が准士官で2人は佐官であるから、尉官がないこととなる。おまけにやたら階級が離れている。これに対して沢村が言うには「お前はまだ若いから尉官には直ぐにすることは出来ん。戦果を上げて自分で成し遂げるんだな。」

こうして出撃の準備は整えられて言った。五十六たちは心の準備をする。整備兵たちもYakを最高の状態に整備する。

3日後、運命の朝を迎えた。五十六は飛行服に着替え、日常生活必需品を背囊に纏め、出撃の時を待った。

そして、いよいよ出撃予定時間になる。五十六は格納庫へと向かった。

格納庫の前では彼の愛機のyakが念入りの整備を受け、出撃の時を待っていた。なお、向こうの世界ではyakという名を使うことは旭日皇国側の不快感を買う怖れがあったため、新たに「飛燕」の名称が与えられていた。

「飛燕」とは同じ水冷式の戦闘機であった旧日本陸軍三式戦闘機にあやかっつてつけたものである。

彼の愛機には、操縦席横に蓮の花を描き込んでいた。これは彼が以前読んだ漫画に影響されて描いた物であるが、彼オリジナルの意味あいを含んでいた。

蓮とは冥界を指すものであるが、今回の場合は冥界ではなく、異界を表す意味で、彼は描き込んでいた。

操縦席に入り、計器をチェックする。計器に異常がないか確認すると、ペダルと操縦桿を動かし動作するか確認する。どちらとも異常はない。

それが終わると整備員が声を掛けてきた。

「燃料満タン。エンジンもしっかり整備しておきました。御武運を。」

「ありがとう。」

短く言葉を交わすと、整備員は機体から降りた。そして、無線に沢村の声が入る。

「よし。エンジン始動だ。」

命令と共に、五十六は始動ボタンを押した。搭載されたアリソン・エンジンは快調に回り始めた。

五十六はエンジンの回転数と温度を示す針を注視する。どちらとも異常はない。それを確認すると、両手を振って整備員に車輪止めを外すよう知らせる。

車輪止めが外され、これでブレーキを解除すればいつでも動けるようになった。

最初に一番機の沢村大佐機が滑走路へ入る。続いて藤沢少佐機が進む。2機が相次いで離陸していく。

いよいよ五十六の番になった。

「管制塔。こちら3番機、離陸の許可願います。」

「こちら管制塔。離陸を許可します。」

五十六は許可が出ると、エンジンの出力を上げ、滑走に入った。

プロペラ機である飛燕は800m程滑走して空中に浮き上がった。機体、エンジン共に異常はない。

「よし。」

五十六は脚を収納し、先に離陸した2機に合流した。3機は編隊を組み、次元転移装置の上空へと向かった。

と、そこで無線が入った。

「こちら地上作業班。まもなく転移装置を作動させる。万が一に備えよ。」

実験では特に問題は起きなかったと、五十六は聞いていた。しかし、あくまで実験の話だ。今回は飛行機を使っているのだ。万が一にエンジンや機体に異常が出ることだってありえる。

五十六はパラシュートの金具をいつでも引けるようにしておく。

そして、転移装置が作動した。地上に設置された4つの鉄塔が、光の壁を作り上げた。

「いくぞー!!」

沢村の声が無線に入り、3機は編隊を組んだままその光の壁へと突入した。

それはほんの一瞬だった。光の壁に突入したと思った次の瞬間には、彼らは見知らぬ大地の上を飛んでいた。

そして物語は始まる。

運命の離陸（後書き）

御意見などをお待ちしています。

ファーストコンタクト

時空転移直後、思わぬ戦闘を行った五十六たちだったが、3機ともその後は何事もなく、ビーコンの誘導によって飛行場に降りることが出来た。

飛行場はもとは牧場だったようで、格納庫や倉庫は牛舎や豚舎等からの転用であった。指揮所と待機所、そして兵舎は平成世界から持ってきたプレハブ小屋となっていた、

着陸し、機体を畑少佐以下の整備員たちに任せると、五十六たちはやはりプレハブで出来た指揮所に移動した。

今後しばらくは沢村大佐が基地司令兼戦闘機隊隊長を務める事になった。

指揮所に移動すると、30代ぐらいの一人の男が待っていた。その男は随分と古めかしい軍服を着ていることから、五十六も直ぐにこっちの世界の軍人だとわかった。ただ、何故か異世界人とのファーストコンタクトをしているという感じは全くしなかった。

「お待ちしていました。自分は旭日皇国陸軍中尉の佐々木裕一です。みなさんと我が軍の間の連絡士官として派遣されました。以後よろしく願います。」

それに対し、沢村大佐が答えた。

「御苦労。自分は基地司令兼戦闘機隊隊長に任じられた沢村大佐だ。よろしく願います。」

2人はお互いに敬礼をした。

「佐々木中尉、紹介しよう。副隊長の藤沢少佐と、3番機搭乗員の高野兵曹長だ。」

佐々木は2人の方を向き、敬礼した。

「よろしくお願いします。」

五十六たちも返礼する。

「全員取り敢えず飛行服から制服に着替える。30分後までに再びここに集まれ。解散。」

沢村は2人に命令すると、一端解散命令を出した。

五十六も荷物を抱えて指揮所から出て、兵舎に移動した。すでにその一室には彼のネームプレートがはめられていた。

彼にあてがわれた部屋は凡そ4畳ほどの空間にベッドと机が置かれているだけの質素な物だった。それでも、ここが戦場であることを考えればこれでも贅沢な物である。

彼は飛行服から制服に着替えて、再び指揮所に向かった。

こちらの世界の季節は既に初夏に入っているので、今回着るのは旧海軍の第2種軍装に似せた、といよりそのままの純白の夏季制服だ。

彼が指揮所に行くと、既に他の2人が着替え終えて待っていた。さすがに元軍人（自衛隊員）だけある。

「遅いぞ。」

「申し訳ありません。」

時間内にやってきたが、一応五十六は沢村に謝しておく。

「よし。では全員・・・といっても4人だが、これより今後の我が隊の方針について話しておく。我が隊はこちらでは仮称、皇国義勇戦闘機隊として戦闘に参加する。国籍マークは現在の日の丸をそのまま使用する。なお、基地には皇国軍に所属しているのを示すため、皇国旗を掲げておくことになっている。」

と、ここで五十六が発言した。

「司令、仮称ということは正式な隊名ではないのですか？」

「そうだ。あくまで正式名が決まるまでの繋ぎの呼称だ。だから隊旗も暫定的に日の丸を使用する。話を続けるぞ。我々は明日から早速出撃する。」

その言葉に、五十六は仰天してしまった。

「あ、明日ですか！？早すぎませんか！！」

まだこちらの世界に来たばかりだというのに。

（戦局はそこまで悪化しているのか？）

まじめにそう考えてしまう五十六。これではソロモン諸島における旧日本海軍と同じ状況である。

「それについては俺も良くわかってる。しかしだ、事情が変わったんだ。佐々木中尉、説明してくれ。」

沢村に変わって藤沢が話しはじめた。

「実は、今日まで小康状態だった敵軍の動きが突然活発化したんです。既に防衛線の幾つかを突破され、中には一気に30km近くも進撃した部隊もありました。このままではここに来るのも時間の問題です。」

まさか今日になって戦局が変わるとは。戦場では何でも起きるといふ事を、五十六は改めて認識する事となった。

「そういうわけだ。」

「じゃあ我々はどこを攻撃するのですか？」

そう質問したのは藤沢少佐だ。

これは非常に重要である。なにせこっちは3機しかないのだ。少数で効果的な目標を選ぶ必要がある。

「飛燕」は改造を加えてあり、熱線探知式の小型ミサイル4発と、60kg爆弾4発を爆装出来るようになっていた。しかしいくら強化してもやはり出来る事には限度がある。

だから、3機でも効果的な戦果を上げる事が出来るターゲットを選ばなければいけない。

「となると、敵の司令部中枢か、補給線を叩くしかないのでは？」

五十六が意見を言ってみた。すると、沢村が頷いた。

「その通りだ。そこで、俺は敵の補給基地を叩く事にした。佐々木中尉。」

「はい。我々の情報機関の調べにより、この基地から西に200km地点に敵の大規模な補給基地があります。」

彼は机の上に地図を敷き、指を指した。

「我々の攻撃目標はここだ。出撃は明朝06:30だ。」

こうして、異空間における彼らの戦闘が始まろうとしていた。

ファーストコンタクト（後書き）

御意見などをお待ちしています。

戦闘開始！！

翌日早朝、五十六達3人のパイロットは出撃準備に入った。愛機の「飛燕」は整備員の手で完全に整備、調整されていた。

機銃には弾薬が満載され、翼下には30kg爆弾4発とロケット弾4発が発射用レールに装填されていた。

天候や空路に関しての簡単な打ち合わせの後、3人は「飛燕」に乗り込んだ。機体のチェックを行うが、異常はなかった。

「よし。コンタックー！」

五十六は旧日本海軍式に叫び、エンジンのスタートボタンを押した。アリソンエンジンは快調に回り始めた。

「よし。」

両手を振り、車輪止めを整備兵に解除させる。

「よし、全機発進する。先行機の動きに注意せよ。」

無線から沢村隊長の声が響いてきた。

「了解ー！！」

この特設飛行場にはまだ管制塔という贅沢な施設はない。地上誘導員の信号と、自分の目だけを頼りに離陸する。

幸い、事故もなく3機は飛び立った。

「それにしても重いな。」

飛び立つなり愚痴を呟く五十六。しかしそれもしかたがない。なにせ彼が今回のような過重負荷の状態で飛んだのはこれまでにわずか2回だけなのだ。

「けど、今回は実戦なんだ。」

昨日既に1回実戦を経験しているが、あれは言わば突発的な戦闘であつたから、彼にとっては戦つたという意識が薄かった。

しかし、無意識の内に身体は戦闘のことを覚えてしまったようだ。今の彼には、初出撃の時にくる緊張のような物が全くなかった。

飛び立っていく3機を見つめる1人の少女がいた。

「間違いない。あれだわ。一体あれは……」

昨日自分達を助けてくれた謎の物体。それを追いかけて、彼女はここまでやって来ていた。

「本当にあれは何なのかしら……」

その時である、男の罵声が響き渡った。

「こら！！そこで何をやっているか！？」

「！！！」

遠くに見える山や、時折目に入る集落を目印にして、3機は飛んで行く。目標までの距離は200km。350kmの巡航速度で飛べば1時間もしないうちにたどり着いてしまう。

発進30分後、隊長機から無線が入る。

「後15分もすれば目標だ！全機機銃の試射を済ませろ！！」

戦う時に機銃が使えないのでは話にならない。そのため、戦闘前に機銃の試射を行う。五十六も全銃発射モードにして安全装置を解除する。そして、発射ボタンを押した。

ダダダ・・・

プロペラ軸の20mm機関砲と、主翼に装備された2基のブローニング12.7mm機銃から3本の曳光弾に彩られた火線が走っていく。

他の2機も同様であった。

「異常無しです。」

「よし。では、ミサイルと爆弾の安全装置を解除！いつでも発射出来る様にしておけ。」

五十六はミサイルと爆弾の安全装置のボタンを解除した。これで爆弾は信管が作動する状態となり、ミサイルも発射できる。

「目標まで後5分だ。編隊を解け。」

3機は横一列の編隊を解いた。

「突撃！！」

アルメディア帝国軍の陣地では、朝を迎え、兵たちが朝食の準備に取り掛かっているところだった。

炊事の煙が上がリ、起床ラッパが鳴リ、兵たちが寢床から出る。そんな中で、兵たちは聞き覚えのない音がしてきたのに気づいた。

ブーン・・・

虫とは違う、重々しい音。

「何だ!？」

兵たちは音が何所からしてくるかわからず、四方を見回すが、音源らしい物は見当たらない。

彼らが狼狽していたその時。

ズドン!!

火柱が立ち上り、凄まじい爆発音が響き渡った。そして、彼らの頭上を見たこともない金属の塊が通り過ぎた。

戦闘開始！！（後書き）

御意見などをお待ちしています。

任務完了

攻撃は完全に奇襲となった。

「よし、どんどんやれ！！各自自由攻撃だ！！ただ無駄な殺生はするな！！」

沢村隊長機からの命令に従って五十六も自由攻撃に移った。

ちなみに無駄な殺生をするなというのは、人道面の意味もなくはないが、主目的は弾を人間に使って無駄遣いするなということだ。最優先目標は物資や武器だからだ。

五十六は次の目標を探した。すると、大量の箱が積み上げられているのが見えた。恐らく弾薬か食料だ。

「ようし、あれをやろう。」

五十六はロケット弾を使う事にした。ロケット弾は全弾と2発ずつの発射モードがある。五十六は2発ずつの発射モードを選択した。

地上からは散発的に敵が小銃を発射してくるのが見える。しかし、こちらのスピードに追いつけないうまく全く当たっていない。

この世界では飛行機はようやく飛んだばかりのはずだ。そんな時代ではまず対空戦闘という概念があるかどうかも疑わしい。あつてもいい所気球や飛行船を狙っての物だろう。500km以上のスピードで飛ぶ飛行機を打ち落とすなど不可能だろう。

こうなると一方的だ。あまり気持ちのいい物ではないが、戦争に卑怯も綺麗もない。それはミリタリーマニアである五十六には良く分かっていた。

「許せよ。これが戦争だ。」

五十六は発射態勢に入った。照準機のと真ん中に目標が入っている。

「発射!!」

五十六は発射ボタンを押した。2発のロケット弾は無事に点火し、発射用レールから勢い良く飛び出した。

シュパー!!

煙と炎を引いたロケット弾は見事集積されていた物資に直撃した。そして、五十六がその真上を飛び去った時である。

グワーン!!

凄まじい大音響が大地を震わした。そしてそれは大気を伝わって五十六の「飛燕」にも衝撃を与えた。

「うお!! 弾薬集積所だったのか!!」

おそらく1会戦分の弾薬が消し飛んだのだろう。

だが、戦場では長い間考えている余裕はない。五十六はすぐに頭を切り替え、次なる目標を探し始めた。

と、彼の目に信じられない物が入ってきた。

「戦車だ！！」

陣地の隅に空き地のように空いている空間があった。そこに数台の車両が止められているのが見えた。それは写真で何度も見た第一次大戦当時のルノーFT17そっくりだった。

「歴史がこつちの世界とは違う。科学力の進歩が早い。」

これは大きな収穫である。彼は戦車の姿をしっかりと脳裏に焼き付けると攻撃態勢に入った。

戦車は第一次大戦で戦場に革命をもたらした兵器だ。おそらく日露戦争と同程度の武器や科学力での戦いを行っているこちらの世界でも同じ事だろう。その新兵器を野放しには出来ない。

彼はまず残っているロケット弾はその戦車に向けて発射した。敵は6両だが、そのうちの1両を破壊した。

「くそ！一発は外した。」

残るのは爆弾と機銃だ。五十六は爆弾を全弾投下モードにする。

「ようそろつ。」

戦闘機である「飛燕」が重い爆弾を吊ったまま急降下したらバラバラになってしまうかもしれない。

そのため角度の浅い緩降下爆撃を行う。この方法は通常は撃たれやすいが、対空火器がないのなら問題ない。

「ようし、投下。」

機関銃を乱射しながら彼は爆弾を投下した。後は命中を祈るのみだ。彼は操縦桿を一杯に引いた。

彼が振り返ってみたとき、そこには6両の炎上する戦車があった。

これで対地攻撃用の武装は全て使い切った。機関銃弾がまだ残っているが、彼が陣地を見回すと、既にめぼしい目標は見当たらなかった。

「任務完了だな。」

すでに他の2機はいない。恐らく先に帰ったのだろう。彼も翼を翻し、帰投する。基地まではビーコンの電波に沿って帰っていけばよい。

40分後、彼は基地に無事帰還し着陸した。

「ご苦労様でした。」

駐機場に機体を止めると、整備兵が出迎えてくれた。すると、彼

は基地の空気が慌しいように感じた。

「何か基地が慌しくないか？」

「ええ。あなた達が出撃した直後に、基地に侵入者があって。」

「侵入者？」

五十六は一体何者が侵入したか気になった。

任務完了（後書き）

御意見などをお待ちしています。

戦果報告

「侵入者ってどういうことだい？」

コックピットから降り、五十六はその整備兵にさらに尋ねた。

「侵入者というより、基地の近くであなた達が出撃していくのをジ
ーっと見ていたらいいんですよ。それを警備の兵が見つけて、捕ま
えたんです。もしかしたら敵のスパイかもしれないってことで。」

そう言つと、整備兵は話を切り上げ、近くにいる他の整備兵に指
示した。

「とりあえず、自分の知っていることはそれだけです。おーい！！
機体をハンガー（格納庫）に入れるぞ！！」

五十六の「飛燕」は整備兵たちによつて格納庫に入れられた。

「スパイねえ。」

有りえないことではないが、昨日隠密の内に開設した基地に、敵
のスパイがいきなり来るのもおかしいと思えた。

「ま、それは後にして、戦果報告をしないと。」

五十六は指揮所に向かった。指揮所では、既に沢村達が彼を待っ
ていた。

「遅かったな。」

「すみません。最後の攻撃に夢中になってしまつて。」

頭を垂れる五十六。

「その事はまあいい。先に戦果報告してくれ。」

「はい。」

五十六は戦車を発見した事を含めて沢村に報告した。しかし戦車という単語が出た途端、沢村の表情が厳しくなった。

「そうか・・・お前の言う通りかもしれんな。もしかしたらこの世界の歴史の進行状況は我々の物とは違うかもしれん。」

それは厄介な問題である。彼らが飛行機を持ちこんで戦っている理由の一つとしては、敵が持っていないからに尽きる。しかし、敵の技術革新のスピードが速いことは、すなわち飛行機が早い時期に戦場に現れるかもしれないことを指す。

性能的には大幅に上回るだろうが、数の差はどうにもならない。

かつて「戦国自衛隊」という映画があつた。この映画では戦国時代にタイムスリップした陸上自衛隊が、戦車を始めとする近代兵器で最初は優位にたつが、その後物量に押され最終的に倒されてしまう話だ。

もしかしたら、五十六たちもそれと同じ目に遭うかも知れない。戦場では質も重要だが、量も重要なのだ。

「ま、それについては善後策を考えておかねばいけないが、当面は大丈夫だろう。それに、今日俺たちが出撃した後に、司令が新たに零戦もどき2機と、テキサン1機を送ってくれた。これで大幅な戦力増強に繋がるはずだ。」

これは朗報である。一気に戦力が倍加した。

「本当ですか？」

五十六は驚きのあまり声を上げてしまった。

ちなみに零戦もどきとは、T6テキサン練習機をアメリカで映画撮影用に、塗装や概観を零戦に似せて改造した物だ。

この改造のおかげで、最高速度を始めとする性能が上がっている。

一方、テキサンというのはそのT6のオリジナルの機体だ。この機体は練習機であるが、主翼に小口径機関銃2挺を装備し、翼下に簡単な改造でロケットを装備できる。そのため、紛争では重宝されてきた。

また、複座であるから偵察機としても充分使える。

「ああ、零戦もどきは格納庫で既に整備中だ。テキサンは早速戦果確認のために出撃している。」

これで保有機が3機から一気に倍に増えた。

「搭乗員も皆飛行時間500時間以上の奴らだ。横井ががんばってくれたおかげだよ。」

沢村の言葉を聞いて、五十六は思った。

（また訳ありの人たちなんだろうな。）

と。ちなみに横井とは、海鷲島で訓練教官をしている内の一人だ。

「ま、そういうわけで詳しい戦果判定は偵察機が写真を撮ってきてからにする。以上、解散。」

解散と言っても3人しかいないのだが。解散直後に五十六は沢村に聞いてみる。

「隊長、スパイを捕まえたって本当ですか？」

「うん？ああ、そうらしいな。俺もまだ詳しい事は知らないんだ。
・どうせだ、そいつの面を見に行ってみようぜ。」

こうして、2人はそのスパイが捕らえられているという兵舎に向かった。

その部屋に着くと、五十六の知らない警備隊の兵士（兵曹長）が2人を止めた。ちなみに、この警備隊も河口がスカウトして現代から連れてきた人間である。

前歴が警官や自衛官である者ばかりで構成されていると五十六は聞いていた。

「なんでしょうか大尉？」

「いや、ちよつとスパイの面を見たくなつてな。」

すると、その准尉は困った顔をした。

「それは・・・まだ取調べ中です。」

「贅沢言つなよ。俺が責任取るから良いだろ？」

「ですが・・・」

こうした押し問答が15分ほど続いたが、その時扉が開き、一人の人物が出て来た。その人物は、五十六も知っていた。

「あ、警備隊隊長の五十嵐大尉。」

中から出てきたのは、五十嵐道男大尉だった。

「おお、沢村司令どうしたんです。それに高野兵曹長も？」

「ああ、すまん。スパイを捕まえたって聞いたから。」

その言葉に、五十嵐は間の抜けた様な言葉で返した。

「スパイじゃありませんでしたよ。ただの農民でした。」

それを聞いてその場の全員は一安心した。

「じゃあ早く解放しろ。」

すると、今度は五十嵐が困った表情をした。

「それが向こうが出てきたくないと言っんです。なんでも飛行機に乗ってみたいとかで。」

さすがに沢村も驚きを隠せなかった。

「何！！？こも世界には物好きがいるもんだな。ようし、だったら俺が会ってやる。ついでだ。高野、お前も一緒に来い。」

こうして、2人がその人物に会う事となった。

しかし、2人ともその人物を見て開いた口が塞がらなかった。なぜなら、目の前にいたのは美しく長い黒髪を持ち、整った顔立ちをした少女だったからだ。

少女の意志

五十六と沢村の目の前に表れたのは、どう見ても20歳前後の妙齢の女性だった。もしかしたら少女かもしれない。

もんぺに着物という服装だが、均整の取れた顔立ち、白い肌、シヨートに纏めた黒髪、そして涼やかな目元等、五十六にとってはかなり可愛い方に入る。

「ええと、お嬢さんは一体何者かな？」

取り合えず沢村がそう聞いた。しかし、少女から帰ってきた返答は意外な物だった。

「人の名前を聞く前に、まず自分から名乗るのが礼儀では？」

五十六にはかなり生意気な返答に思えた。実際沢村も面食らっていた。しかし、その言葉の中にはリンとした強い意志のような物がある。そうとも感じられた。

「これは失礼した。私はこの基地司令であり、飛行隊指揮官も兼任している沢村大佐だ。こっちに居るのは飛行隊の高野飛曹長だ。」

「すると。じゃあ、あの空飛ぶ機械・・・確か飛行機でしたね。あれに乗っていたのはあなたたちなんですか？」

「それは後々答えていくにして、まずは君の身分を確認しておきたい。」

この沢村の言葉に、少女は少しムスツとしたが、すぐに答えた。

「私は姫神真理奈。歳は17でここから40km程離れた豊村の住民です。」

17と聞いて、五十六はかなり驚いた。

（17・・・見かけよりすごく若いじゃないか！）

彼にとって17歳の女性とは、まだまだ子供であるというイメージだった。しかし目の前の少女、真理奈はそこまで老けているとは言わないが、彼のイメージのような女性にはない落ち着きや強い意志を感じ取れた。大人びているとも言おうか、そんな感じである。

「ふむ。で、なんで40kmも離れた村の少女がこの基地の近くにいたのかな？」

「実は・・・昨日私の村はアルメディア軍の襲撃を受けました。私は家族と逃げましたが、敵の装甲騎兵に追いつかれ、家族は殺されました。私自身危なかった・・・そこへあの飛行機が現れて助けてくれたんです。・・・私はその正体が知りたくて、必死に飛行機が飛んでいった方へ歩いてきました。」

これには2人とも驚いた。40kmというのは飛行機では数分だが、歩けば20時間、どんなに早く移動しても10時間以上は掛かるはずだ。その距離を目の前の少女は歩いてきたと言うのだ。

「そんな遠距離からよく辿り着けたね。」

ついつい思ったことを口に出した五十六。

「敵が乗り捨てていった馬があったので、半分以上はその馬に乗ってきました。途中で私が降りた途端逃げちゃいましたけど。」

（なるほどね。時速40kmは出る馬なら20kmは30分で着く。）

「なるほど。君がここに来た理由と方法は理解した。身分については、また皇国軍に頼んで調べてもらおう。で、飛行機に乗りたいたいのは本当かな？」

沢村が話題を切り換えた。その途端、真理奈が身を乗り出してきた。

「はい！！是非！！」

「うわ！！」

沢村が身を引く。だがすぐに元の姿勢に戻る。

「だがね。君は一介の民間人だろ。我々は義勇軍だが一応軍という組織だ。そう簡単に入れるというのもな・・・」

「そんな・・・どうかお願いします。」

真理奈が頭を下げた。しかし、沢村は険しい表情をしている。

と、ここで五十六は考えた。

（彼女が問題ない人間ならこの基地にいてくれた方が嬉しいな。）

かなりばかげた考えである。思いつき私情を交えている。だが、五十六にはそれ以上に漠然と彼女を仲間に加えたいという気持ちがあった。

そこで、助け舟を出すことにした。

「いいじゃないですか司令。身元確認してヤバイ人間だったら自分としても退去願いますが、そうじゃないなら貴重な志願者ですよ。今我々の隊はちょうど人手不足なんです。パイロットじゃなくても仕事は色々ありますし。」

それを聞いて、沢村はしばらく考えていたが、ふいに言った。

「ようし。なら取り敢えずその志願の心意気は受け止めておこう。しかし私はあくまで基地司令であって軍司令官ではない。許可を取るからしばらく時間が欲しい。まあ、君には身元確認が出来るまで基地にいてもらわなければいけないしね。」

その途端、真理奈の顔が一気に明るくなった。

「あ、ありがとうございます!!」

真理奈は嬉しさをおもいつき表情に出しつつ、ぺこりとお辞儀した。

「まったく。おい！高野飛曹長!!」

突然名指しされ、五十六は嫌な予感がした。

「なんでしょうか？」

「お前がこの娘、真理奈嬢のお目付け係りをしろ。」

「ええ！！！」

「はああ。」

数十分後。宿舎の廊下を、溜息をつきながら、真理奈を連れて歩く五十六の姿があつた。

少女の意志（後書き）

ご意見などをお待ちしています。

新しい仲間

五十六は真理奈を宿舍の部屋まで案内した。そこは、一番奥の部屋だった。なるべく男たちから離しておく事にしたのだ。

「はい、ここがあなたの部屋です。」

「ありがとう。」

「これが鍵。と・・・便所は女用は廊下の真ん中にあるから。風呂は別の建物にあるからまた案内するよ。」

一応海鷲島では女性は少ないながら訓練中である。そのため、宿舍には女性用の部屋とトイレが用意されていた。

「わかった。」

「で、これが女性用の制服。君はあくまで仮採用だから、まだ階級章はついてないけどね。それと、もしかしたら大きいかもしれないけど、それは服を合わせてくれ。」

五十六は鍵と制服を彼女に渡した。

「俺は5つ先の部屋だから、着替え終わったら呼んでくれ。」

「わかった。ありがとう。」

「それじゃあまた後で。」

真理奈は部屋に入った。それを見届け、五十六も自室へと向かった。出撃した時の格好、すなわち飛行服のままであったので、着替える必要があったのだ。

部屋に戻った五十六は手早く飛行服から、制服へと着替えた。

五十六は持ち込んだ鏡で自分の姿を見る。

「本当に今は軍人してるんだよな。」

鏡には、軍服をピシッと着込んだ青年が映っていた。心なしかその姿は3ヶ月前とは見違えている気がする。

「4ヶ月前にはこんなことになるとは思えなかったよな。まあ常人だったら異世界で戦闘機に乗るなんて考えられないか。」

思えばあつという間の3ヶ月だった。海鷲島での激しい訓練。そして戦い。

戦いといっても、こちら側の一方的な攻撃だったが。こうやって冷静になって考えると、自分はなんと楽な戦争をしているのだろうと思った。

ミリタリーマニアの彼は随分と色々な文献を読んできた。その中には厳しい戦争を乗り切った生き残り達の伝記もあった。

その多くは、戦争が如何に過酷な物かを伝えていた。それを考えると、彼の戦いなど足元にも及ばない。

「俺・・・生き残れるのかな。」

命を捨てても良いと思ってこの組織に入り、戦闘機パイロットとなったが、いざ考えてみると、そんな事を感じてしまう。

しかし、五十六が感傷に浸っている時間は唐突に中断された。

トントン。

ドアがノックされた。

「あ、着替え終わったのかな？」

五十六はドアを開けた。

「お待たせ、着替えたわよ。」

そこには、制服に着替えた真理奈が立っていた。

女子用の制服も、男性用と同じく旧海軍の物を模している。ただし、旧海軍には女子用の制服はなかったから、どちらかというと海上自衛隊の服に似ている。

洋服である制服を彼女が着こなせるか少し心配していたが、それは杞憂だったようだ。

多少制服は大きいようだが、彼女は見事着こなしていた。似合っていると言って良い。

「へえ。似合ってるじゃん。」

「そう？ありがとう。」

まんざらでもなさそうである。

「けど、こつちの世界の人間は和服を多用しているって聞いたから着こなせるか心配してたけど、きっちり着られたね。洋服を着た経験があるの？」

「え？まあね。」

彼女が一瞬視線をずらしたのを、五十六は見逃さなかった。

（なんだろう？）

しかし、今追及するのは止めとくことにした。

「それじゃあ基地を案内するよ。」

五十六は彼女に基地を案内する。

案内するとは言っても、やっぱり時代ギャップは大きかった。彼女自身まったく基礎知識すら知らない単語を五十六は連発したため、そのたびに一から説明しなければいけなかった。

兵舎を一通り見て、そして今度は滑走路や格納庫を見て回った。

格納庫に来て、彼女は目を輝かせた。

「うわあ！！これが飛行機！？」

「そう。俺が乗ってる「飛燕」だよ。」

「へえ、近くでみると案外大きいのね。」

興味深々で「飛燕」を見る真理奈。

まるで子供のように見て回る真理奈を見て、五十六は提案した。

「乗ってみる？」

この提案に、真理奈は素っ頓狂な声を上げた。

「え！？いいの？」

「ああ。」

五十六は彼女の手をとって主翼の上に乗った。

「そこ、フムナって書かれている部分に気をつけて。」

「わかったわ。」

フムナと書かれているのはフラップだ。

「さ、ここが操縦席。どうぞ。」

五十六に促され、彼女は操縦席に入る。スカートを履いているので、最初は少し入りにくそうにしていたが、なんとか操縦席に座った。

「
うわああ。
」

彼女の瞳は輝いていた。

新しい仲間（後書き）

御意見などをお待ちしています。

新しい朝

謎の少女真理奈が隊に加わった日の夕方、戦果確認の偵察機が戻ってきた。

機体はT6テキサンという中古機だが、搭載されたカメラは最新式の物だ。

早速写真を使つての、詳細な分析に入る。ちなみに、写真と言ってもフィルム式のものではなく、最新式のデジタルの物だ。印刷用のプリンター、引き伸ばしや画像解析用のパソコン、それらを動かすための自家発電機も彼らはこの世界に持ち込んでいた。

それらが設置された部屋に、隊長の沢村に藤沢、五十六も集まった。真理奈はまだ正式な隊員ではないので、参加を許されていなかった。

「これが遠景の写真です。」

偵察下士官の高貫飛行兵曹長がキーボードを叩きながら言った。33歳の彼は元コンピュータ会社勤務のサラリーマンで、リストラにより首になっていた所を河口に拾われたという経歴の持ち主だ。趣味がカメラ撮影であったのも、今の役職につけられた理由だ。

画面には直ぐに、黒煙に包まれた地上の風景が出てきた。

「随分盛大に燃えていますね。」

写真を見て五十六が呟いた。

「恐らく弾薬や食料に引火した火がまだ燃えているんだろう。」

沢村が冷静な口調で言う。

「次に望遠で撮った写真です。」

再び高貫がマウスとキーボードを動かした。

すると、そこには消火活動をしているのだろうか、動き回っている敵の兵士が写し出されていた。さらに。

「あ！ここ！これ戦車の残骸ですよ！！」

五十六の言葉に、その場の全員が画面を覗き込んだ。

五十六が指差す場所には、確かに砲塔こそ吹き飛んでいるが、燃える戦車の車体らしき物が写っていた。

「ふむ。確かに戦車のようだな。我々の世界のルノーに似ているんだっただな？」

ルノーとは、第一次大戦中にフランス軍が実戦投入したルノーFT17戦車のことだ。小型ではあったが、砲塔と車体の組み合わせと言う、現代型戦車の元祖と言うべき戦車だ。ちなみに、フランス軍はこの戦車を第二次世界大戦でも使用している。

「はい、そうです。」

「となると、やはり我々の世界とは科学技術の発達の仕方が違うよ

うだな。これは注意すべき問題だぞ。」

そうしている間に、高貫が他に数枚の写真を画面に写し出して行く。だが、その後の写真には特にめばしい物は写っていないかった。それらの写真からわかったのは、今回の作戦は目標を達成していたということだけだった。

それでも、五十六としては始めての仕事をこなせた充足感で一杯だった。

「ふむ。他には特にめばしい写真はないようだな。よし高貫、それらの写真を全部プリントアウトしておいてくれ、明日の皇国軍との会議に使うことになるだろうからな。」

「わかりました。」

こうした戦果確認の会議は終わった。

結局その日はそのまま何事も無く終わった。3人は疲れを癒す為に、早めに床についた。

そして翌日。

朝6時に起床し、7時から朝食というのがこの部隊の日課である。ただし、それはパイロットの物で、整備員や警備兵はシフト制だから違う。

五十六が食堂に顔を出した時も、整備兵や警備兵の姿は見当たらなかった。

ポツンと一人だけ藤沢が座っていた。五十六はカウンターで食事を受け取り、彼の隣に座った。

「おはようございます。」

「ああ、おはよう。」

「隊長はもうお出かけになったんですか？」

前日皇国軍との会議に出かけると言っていた沢村の姿が見当たらないので聞いてみた。

「ああ、30分ほど前に出て行ったよ。」

「そうですか。」

会話をしながら、五十六も食事を始める。今日の朝食は洋食だ。ちなみに、この食事でも毎日和洋の交互となっている。また、夕食は金曜日にはカレーという海軍の方式を採用している。

金曜カレーと言うのは、旧日本海軍と海上自衛隊で採用されている方法で、長い海での生活で、曜日間隔を忘れないようにしている方法である。

と、そこへ。

「おはようございます。」

食堂内に響く澄んだ声。

「よう、おはよう。」

「おはよう姫神さん。」

真理奈がやってきた。彼女は食事を受け取ると、五十六と藤沢の正面に座った。

「朝から元気だね君は。」

五十六がポツリと聞いた。

「だって今日からこの部隊で働けるんですから。」

その無邪気な表情に、五十六は少し不安を覚える。

（大丈夫かな？）

と、その時彼は気付いた。

「フォークとナイフをちゃんと使い分けている。」

洋食のセットだから、当然食器はフォークとナイフだ。しかし、それを彼女はしっかり使い分けていた。

（昨日の洋服といい・・・農村の少女がこつも上手く出来るのかな？）

スパイではないのだろうけど、彼女には何か秘密がある気がして
ならなかった。

「ごちそうさま。」

ふいに藤沢が言った。見てみると、彼の皿の上の料理は綺麗にな
くなっていた。

「高野、今日は出撃は無いだろうが、万が一もある、緊急出撃には
備えて置けよ。」

「はい。」

そして食堂には彼と真理奈だけになった。その時、五十六の頭に
ある考えが浮かんだ。

「ねえ姫神さん？」

「何？」

「いつしよに飛ぶ気はありませんか？」

新しい朝（後書き）

御意見などをお待ちしています。

試験飛行

午前10時を回った頃、滑走路上にはテキサンが引き出されていた。

昨日偵察に出撃したものの、一夜かけて整備兵たちが整備したものだ。

「本当に良いんですか？」

飛行服に着替えた真理奈が前を歩く五十六に、心配そうな表情で言う。

「大丈夫。副司令の許可は取ったから。」

副指令とは、藤沢の事だ。

彼は彼女の質問をそうあしらいつつ、テキサンに近づいていった。

「あ、高野少尉。言われたとおりにしておきました。」

整備兵がコックピットから出てくる。

「ありがとうございます。」

「一応、試験飛行も兼ねてという事ですが良いんですか、彼女乗せて？」

整備兵が一応確認する。

「大丈夫。副司令の許可は取っておりますから。」

「わかりました。燃料は1時間分です。お気をつけて。」

「はい。」

二人は敬礼すると、早速発進の準備を始めた。

「さ、来て。」

主翼に乗ると、五十六は真理奈に手を差し伸べた。

彼女はその手を取り、主翼に乗る。そして五十六に指示され後部座席に座った。

「計器やボタンには触らないください。それと、前の席に僕は座りますが、会話する時は、その伝声管で会話してください。」

五十六は伝声管を指差した。

「わかりました。」

「じゃあ座って。」

言われるまま彼女は後部座席に座った。その後五十六がベルトを締める手伝いをする。それが終わり、ようやく五十六は前の操縦席に移動する。

そして前に誰もいないのを確認すると、スタータースイッチを押

した。エンジンは咳き込む事も無く、順調に回り始めた。

「ようし。」

彼は伝声管を取った。

「姫神練習兵、聞こえますか？」

数秒待ってみるが、返事はない。

「姫神練習兵？聞こえますか？」

もう一回言つと、ようやく返事が返ってきた。

「はい。聞こえます。」

「1分ほど暖機運転をしたら離陸しますから、ちょっと待ってください。」

エンジンをかけて直ぐに全開にするとエンジンを傷めてしまう。だから、車と同じくエンジンの温度が温まるのを待つ。

その間に、水平舵を始めとする各種舵が作動するか確認する。

そうしたチェックを全て終わると、エンジンの温度も丁度良くなっていた。

「ようし。」

彼は両手は振って、整備兵に車輪止めを外すよう合図した。これ

でブレーキさえ解除すれば機体は動き出す。

「じゃあ行きます。」

「はい。」

五十六はブレーキを少しずつ解除し、機体を滑走路に向けて進めていく。

滑走路まで機体を進めると、管制塔に着陸許可を貰う。もっとも、空には飛行機など飛んでいない場所だ。そして天候も今の所問題ない。許可は直ぐに出た。

スロットルを一杯に引き、エンジンの出力を全開にする。レシプロのテキサンは短い滑走距離で直ぐに浮き上がった。

浮き上がると、直ぐに車輪を畳む。今回はお客さんを乗せているし、乗っているのも練習機だから急激な上昇は行わない。少しずつ高度を上げていく。

高度1000mまで上げるまで10分近くかける。そこまで高度を上げた所で、水平飛行に入る。

「姫神さん。下を見るといいよ。」

初めて空を飛んだので、ずっと緊張しっぱなしだった真理奈は、目を恐る恐る地上へと向けた。

そして、まるで箱庭のように小さくなった地表の美しさがその視界に入ってきた。

「うわああ!!」

彼女の感嘆の声を伝声管越しに聞ききつつ、五十六は次の動作に入る。

機体を旋回させる。一応試験飛行であるから、一通りの動作は行わなければいけない。

「旋回するよ。気をつけて。」

五十六は操縦桿を少し右に傾け、ペダルに力を掛けた。機はそのまま右に旋回を開始する。

「右旋回異常なし。」

右旋回を終えると今度は左に機を傾けて左旋回を行う。こちらも同様に異常なしだった。

「よし。」

そしてそのまま機体を再び水平飛行に移した。そして伝声管を取る。

「姫神さん。どう？空は？」

「最高です。すごいすごい。」

まるで子供のようにはしゃぐ真理奈。そんな彼女の表情を思い浮かべながら。彼は本題に入る事にした。

今回真理奈を連れ出したのは飛行機に乗せてやることも目的の一つだったが、真の目的は、真理奈の正体を確かめることだった。

彼は再び伝声管を手にとり、後席の真理奈に声をかけた。

「あのさ姫神さん。ちょっといいかな？」

「え！？」

試験飛行（後書き）

御意見などをお待ちしています。

部隊集結

「あのさ、姫神さん。ちょっと良いかな？」

五十六は真理奈に聞いた。

「はい！？なんでしょう？」

「君って一体何者なの？」

「え！？私は、ただの農村の娘ですけど・・・どうしてそんなことを聞くんですか？」

伝声管から伝わってきた声は、冷静さを保っているものの、どことなく焦りを含んでいるような感じがした。

「いや・・・俺が聞いたところじゃ、確かこの時代の人間って洋服を着る事は滅多にないらしいじゃないか。それなのに、君は洋服を困りもせず着こなした。それに、やっぱりこの時代の人間になじみが無いはずのホークやナイフも上手く使いこなしていた。だから、俺には君がとてまただの農村の娘とは思えない。だから、聞いたままでよ。」

「・・・」

伝声管からは、しばし何も帰ってこなかった。

「答えたくなかったら、答えなくても良いよ。別にそこまでして詮索する気はないから。」

今の所、これはあくまで五十六の好奇心であつた。彼女の身辺調査は一応行われているが、もともと日露戦争と同レベルの科学のこの時代では、即座に身元を調べるためのシステムが存在するはずが無かつた。

「・・・その・・・いつか話すときが来るでしょう。それまで待つてくれますか？」

彼女からの返事はそれだけだつた。

「わかつた。じゃあ待つことにするよ。お、燃料がもう終いだ。」

見ると、燃料計の針は空に近づいていた。元々1時間分しか入れてなかつたから消耗は早い。

「ようし、じゃあ着陸しようか。」

五十六は機種を滑走路に向けた。テキサンは練習機であるから、全ての動作に素直に答えてくれる。着陸も容易であつた。

着陸すると、整備兵が滑走路の隅に行くよう誘導した。

（なんで滑走路の隅に動かすんだ？）

格納庫に入れると思つていただけに、この支持は以外であつた。

とりあえず、支持された場所に機を持っていき、エンジンを止めた。直ぐに整備兵がチョークと呼ばれる車輪止めをする。

五十六は機体から急いで這い出すと、側にいた整備兵に聞いた。
した。

「どういことですか？なんでこんな隅っこに止めさせるんです？」

すると、眼鏡を掛けた若い整備兵が寄ってきた。

「すいません。急に他の受け入れ機のためにスペースを開ける必要になったので、滑走路の隅に移動してもらいました。」

「受け入れ機？あれ、今日向こうから運んでくる機体なんかあったっけ？」

寝耳に水の事である。

「それがつい30分ほど前に連絡が来たんですよ。」

そう彼が言い終えたとき、西の空から爆音がしてきた。

五十六に整備兵、そして機体からやつとこさ降りた真理奈の3人が西の空を見た。

この日の雲量は3。そんなに多くは無い。機体は直ぐに見えた。数は7、8機。いずれも小型単葉の単発機だ。

五十六にはシルエットから、それが直ぐにT6改造零戦と、Yak戦闘機である事がわかった。間もなく、それらの機体は次々に着陸した。

と、着陸する機体を見ながら、五十六はある事に気付いた。

「あれ、これって確か海鷲島の稼動機全部じゃないか？」

彼がもといた世界で訓練拠点にしていた海鷲島。そこに残されているはずの練習機を除いた機種の機数と、今飛んできた飛行機の機数は同じだった。

「その通りだ。高野飛曹長。」

聞き覚えのある声に、彼は振り向いた。

「河口さん。」

彼の後ろに立っていたのは、この部隊の生みの親で、彼がこの世界に来るきっかけを作った男である河口であった。

その彼、今日はピシッとスーツで身を固めていた。

「あなた。どうしてここに？」

突然表れた人物に驚く五十六。

「いやね、実は海鷲島のことを警察に嗅ぎつかれてな。今日捜査官が島に来る事になってしまつて。一応機体は全機フル装備だからそのまま調べられては銃刀法違反で即刻逮捕、押収されてしまつ。」

その言葉に、五十六は納得した。

「なるほど。つまりこちらに航空機を回したのは、警察から逃げるためですね。さすがに異世界までは追つてこれませんかね。」

「その通りだ。」

「しかし、随分無理をしてませんか。」

彼はフラフラ怪しげに着陸したT6零戦を指差した。

「仕方ないんだ。パイロットの数が足りなかったんだ。一応ある程度はスカウトしたんだが、養成が追いつかないんだ。・・・ところで、その娘さんは誰だい？」

河口は真理奈の事を聞いてきた。

「あ、彼女は我が隊に志願してきた一般市民です。」

真理奈が河口にぺこりとお辞儀した。

「姫神真理奈です。よろしく願います。」

五十六は、勝手に志願兵を入れた事に河口が腹を立てないか心配した。しかし。

「ああ、それはありがとう。この部隊は人手不足だから。しっかりとがんばってくれ。」

と、型通りの言葉を言っただけだった。

しかし、この時五十六も真理奈も気付かなかった。彼が、何か腑に落ちない表情をしていたことを。

部隊集結（後書き）

御意見などをお待ちしています。

予想外の仕事 昇進編

全部隊がこちらの世界に移動してくるという、予想外のアクショントに見舞われたが、時は待ってくれない。今の状況下で最善を尽くす。それが沢村司令以下の使命だった。

五十六も同じであった。彼は彼でやれることをこなすだけである。

ところが、そのやるべき事に思いもよらなかった事態が追加されたのは、敵補給基地爆撃の3日後であった。

「勲章の授与ですか？」

新米パイロットの訓練教官をやっていた途中で、突然司令官室に呼び出された五十六の第一声であった。

「そうだ。」

椅子に腰掛けていた飛行隊隊長兼基地司令官の沢村はタバコを吹かしながら素っ気無く言った。

「あの、詳細を聞かせていただきたいのですが？」

いきなり勲章の授与と言われても、何のことだかさっぱりわからない。

「うむ。実は先日の敵基地爆撃が予想以上の効果を上げているらしい。それでだ。皇国軍がその戦果に報いる意味で、我々3人に勲章を授与してくれるそうだ。」

「そういう訳ですか、ではいつ戴けるのですか？」

「予定では明日だ。この基地から南に150km行った小摩木という港町に陸軍司令部があつて、そこで授与してくれるそうだ。」

明日という単語に五十六は耳を疑った。

「明日！？え、だって明日は皇国軍の要請で前線への爆撃任務を行うのでは？」

五十六は数時間前、皇国軍の連絡将校である佐々木少尉からそう聞かされていた。敵補給基地への爆撃で、進撃速度を大幅に鈍らせる事には成功していたが、敵の一部部隊は遮二無二進撃を続けていた。そこで、明日これらへの掃討爆撃を行う事になっていた。

「別にその任務には他の隊員が出て行くだけの話だ。」

沢村はあつさりと言ったが、五十六の胸の中は不安で一杯になった。先日の部隊総移動で海鷲島にあった機体とパイロットのほとんどがこの基地にやってきた。しかし、その殆どは五十六と同じく向こうの世界でスカウトされた青少年少女だ。そのため、飛行時間が60から80時間しかない者がパイロットの4割に達するのだ。その他のパイロットも実戦経験や自衛隊での戦闘訓練経験がある者はほとんどいない。そんなパイロットにいきなり攻撃任務をやらすなんて無茶である。

ちなみに、旧日本海軍では太平洋戦争開戦当時、1000時間飛んでいない人間は半人前扱いされていた。

問題は人間だけではない。いきなりの機数増加で整備面にも負担が掛かっている。そのため、飛行中にエンジントラブルなどが発生する率も急上昇しているのだ。今はまだ大きな事故などは起きていないが、戦闘時には何が起きるかわからない。新米パイロットではそういう不測の事態に対処する能力も低い。

五十六の不安に、沢村も気付いた。

「お前の言いたいことは俺にもわかる。だが、ここは戦場だ。贅沢は言っていられない。使える物は親でも使わなければ生きていけない。」

「それだつたら勲章の授与を延ばしてくださいよ。」

五十六は意見具申するが、沢村がうんと言う筈が無かった。

「そういうわけにはいかないよ。俺たちはこの世界では居候だ。あくまでこの国のために戦っているんだぞ。その相手の御機嫌を取るのも仕事の内だ。」

この言葉に、五十六はすごい嫌そうな表情をした。ミリタリーマニアである彼は戦史に詳しい。そういう体面や面子に拘ったゆえに、勝てるはずの戦いが勝てなくなった例はいくつもある。だからそれを知っている五十六はそういうことが大嫌いなのだ。

「高野。すまん。こればかりはどうにもならんのだ。それにだ。皇国軍からのより一層の信頼を受ける上でも必要なんだ。わかつてくれ。大丈夫だ。相手はまともな飛行機を持っていないんだ。新米パイロットでも大丈夫だよ。」

「はあ・・・」

五十六の不安は払拭されない。何せ、離着陸さえ覚束ないパイロットが何人もいるのだ。

しかし、五十六はこれ以上言っても仕方がないとも思った。

「わかりました。お話はわかりました。命令には従います。では。」

彼は部屋から出て行こうとした。

「うおい。ちょっと待て。」

沢村が引き止めた。

「何ですか？まだ何かあるんですか？」

これ以上の厄介事は御免である。早く戻って後輩たちの訓練を行いたいと思っていた。

「ああ。お前に渡す物があつた。ほれ。」

沢村は五十六に封筒を投げ渡した。

「なんですかこれは？」

「開けてみればわかる。」

五十六は封を開け、中に入っていた一枚の折りたたまれた紙を出した。そしてその紙を開いて目を通した。その途端、彼の表情が驚

きの物になった。

「これは、昇進通知じゃないですか!!」

「ああ。3日前の爆撃作戦の褒賞だ。」

「しかし、自分はまだ兵曹長になって一ヶ月しか経っていませんが。」

通常、軍隊などではこうした昇進は最低でも何カ月ごとと決められている。一ヶ月ではいくらなんでも早すぎる。

「家は厳密な軍隊じゃないから気にするな。それに一気にお前の下の人間が増えたからな。指揮官としての士官が必要なんだ。そればかりはどうにもならんからな。」

確かに、この部隊には士官はいない。そもそもが整備兵や警備兵、さらには炊事兵やその他の役職の者を含めて150名そこそこの小さな軍隊なのだ。

「とにかく。それを持って被服科に行って急いで少尉用の礼装を貰って来い。ついでにその他の身支度も整えていつでも出発できるようにしておけ。場合によっちゃ向こうで一泊という事もあるからな。それと夕食を食い終えたら第二会議室に来い。そこで打ち合わせをする。」

結局、五十六は訓練生の面倒どころではなくなってしまった。彼は直ぐに被服科に行くと新品の制服一式を受け取り、それが終わると出撃のための準備をする。拳銃をはじめとする各種装備のチェックをし、鞆に着替えなどの必要な物を入れる。

こうして慌しく準備をしているうちに夕食の時間となった。五十
六はその夕食を急いで食べ終えると、今度は第二会議室に向かった
のであった。

予想外の仕事 昇進編（後書き）

御意見などをお待ちしています。

予想外の仕事 会議編

五十六が入った時、第二会議室には既に他の二人が揃い、机を囲んでいた。

（しまった。）

心の中で思わず舌打ちする五十六。また遅くなったことで怒られると思ったのだ。しかし、予想に反して沢村の口調は柔らかかった。

「前回よりは早くなったな。」

「へ！？」

意外な言葉に、五十六は気の抜けた表情をってしまった。

「何間抜けな顔をしているんだ。会議を始めるぞ。」

「あ！はい。」

叱責されて姿勢を正し、急いで机に駆け寄る五十六。そんな彼を沢村は少し呆れた様に見ていた。

「まったく。では明日の計画に付いて話すぞ。」

沢村はそう言うと指揮棒を出して、机の上に敷かれた地図に目を向けた。

「明日の計画は明朝0530（まるごさんまる）に離陸し、南15

0 kmの小摩木に0600（まるろくまるまる）に到着するように飛ぶ。本来なら最短距離を一直線で飛んでいきたい所だが、我々はこの付近の地理を完全に把握したわけではないので、迂回しながら地理把握をしつつ飛ぶ。」

この言葉に、五十六は大きな衝撃を受けた。

（飛んでいくのか！？）

てつきり陸上を車かなんかで移動すると思っていただけに、直接飛んでいくと知らされた彼の驚きは相当な物だった。

「え！？飛んでいくんですか？」

「ああ、そうだよ。」

「何を今更言っているんだ。」

沢村と藤沢の二人が五十六を馬鹿にしたような目で見る。

「だって、向こうに飛行場あるんですか？」

彼は直球で質問をする。日露戦争、もしくは第一次大戦とほぼ同レベルの科学力であるこの世界では、航空機はせいぜいライトフライヤー（ライト兄弟が初めて友人動力飛行をした機体）と同程度の物があると思っただけに、飛行場があるとは思えなかった。

「あるよ。じゃなきゃ飛んでいくなんて言わないよ。あ、そうかお前にはまだ言っていなかったな。実はな、河口さんは商売柄こちらの政界や財界に太いパイプを持っている。だから、そのコネを使っ

てかなり前からこちらの世界に部隊展開を出来るように下準備を進めていたんだ。その一つがこの小摩木に造った飛行場だ。ちなみに他にも数箇所の飛行場が完成している。いずれも不時着用飛行場に毛が生えたような代物だが、いつでも使えるように整備されている。

「

沢村が得意げに説明した。

（なるほど、そういうことか）

河口という人間に感心すると共に、彼は今後この部隊が今後他戦線に転用される可能性が高いことを知った。

「では話を戻すぞ。現在の所気象予測では飛行に問題はない。ただし万が一に備えて機銃弾はフル装備、そしてロケット弾も4発を懸吊する。もちろん、燃料も満タンだ。」

すると、五十六が手を上げた。

「むこうに付いたら整備と補給はどうするんですか？」

飛行機に限らず、機械という物はデリケートだ。だから一度使ったら整備は欠かせない。もし怠ったりすると、突然のエンジン停止や機銃の暴発などという致命的な故障に繋がる可能性がある。だから整備は不可欠だ。

しかし、如何に五十六たちの世界では60年前のエンジンでも、こちらの世界で整備できる人間がいるとは思えなかった。

「いい質問だ。だから、整備兵も2名ついてくる。それにともなっ

てT6型機が1機付いて来る。燃料に付いては近距離だから大丈夫だ。」

「そのパイロットは？」

「今橘に決めてもらっている。」

橘とは、第二陣を率いてきたパイロットだ。元30歳の彼は沢村、藤沢に継ぐ腕を持っている。階級は大尉だ。ただし不断は科目で、目つきも悪い。だから彼と話をする人間は少ない。経歴については五十六も良く知らなかったが、傭兵出身というのが部隊内の専らの噂だった。

閑話休題。

「そのパイロットに今回の事を教えなくて良いんですか？」

五十六には何故そのパイロットがここにいないのか不思議でしようがない。

「教えるよ。後でな。T6型機は俺たちより2時間遅れで来る事になっっているからな、わざわざ一緒に教える必要もないさ。」

「何で2時間遅れなんですか？」

一緒に飛べば良いのにと五十六は思った。

「他の攻撃隊と発進を合わせるためだ。」

そう言われて納得する五十六。他の攻撃隊というのは、彼ら以外

のパイロットで編成された攻撃部隊の事だ。

「次に小摩木の飛行場に付いて説明するぞ。飛行場は海沿いの高台に作られている。滑走路の長さは約900mだ。ただし幅が狭いから3機同時ではなく、1機ずつ着陸する。それと、同地は海に近いが突風が吹くなどはないらしい。それと、・・・」

この後は細かい説明が続いた。その内容1つ1つを五十六は頭に叩き込んだ。メモを取らないのは、万が一不時着などして情報が外に漏れないとも限らないからだ。

「・・・以上だ。質問は？」

五十六、藤沢共に質問は無かった。

「よろしい。では明朝0430（まるよんさんまる）起床。食堂で機内食を受け取った後荷物を持って格納庫に集合だ。以上、解散。」

こうして出撃前の会議は終わり、五十六は自室に戻るために会議室から出た。廊下に出ると、ちょうど隣の第一会議室の会議も終わった所であった。会議室から続々とパイロット達が出てくる。

明日が初陣となるパイロットたちの顔は、ある者は自信に満ち、あるものは恐怖し、ある者は無表情だった。それは以前、五十六が読んだ何かの戦争記録集にあったような光景だった。ただ違うのは、彼らが戦死する率が限りなく低い事だ。

彼らを一瞥すると、五十六は部屋に戻った。既に荷物は纏めてある。五十六はそのまま床に入った。緊張はあったものの、後輩への訓練が忙しかったこともあり、彼は直ぐに眠りに落ちた。

そして翌朝0430・目覚まし時計の音共に目覚めた五十六は素早く飛行服に着替えると荷物の入った鞆を持って部屋を出た。他の隊員たちを起こさないよう、静かに廊下を歩きながら食堂に向かった。

季節は秋であるから日の出はまだである。それでも、東の空は明るくなり始めていた。物音が殆どない早朝の基地には、ある種の幻想的な空気が渦巻いているように感じられた。

食堂で炊事兵から機内食であるサンドイッチと握り飯、そしてお茶が入った水筒を受け取ると、今度は駐機場に向かった。ちなみに、サンドイッチと握り飯なのは片手で手軽に食べられるからと、なるべく食べる物の種類を増やそうという気遣いからだ。

そして、兵舎から出たところで。

ババババ……

エンジンの音が鳴り響いた。

予想外の仕事 会議編（後書き）

御意見・御感想をお待ちしています。

予想外の仕事 出発編

整備兵たちの手によって3機のYakこと「飛燕」のエンジンが始動され、暖機運転に入っている。エンジンから発せられる爆音が、夜が白々しく明け始めた飛行場内に響き渡る。

五十六は機体に向かって歩いていく。その途中で、沢村と藤沢が立っているのに気付いた。

「沢村隊長、藤沢少佐!!」

五十六が声をかける。もちろん、爆音にかき消されないようにそれなりに大きな声だ。

「おう!!」

沢村が五十六に気付いた。

「おはようございます。」

「おはよう。十分眠ったか？寝不足は飛行中大きな敵となるぞ。」

「はい、十分に。」

「そうか。よし、じゃあ2人とも自分の機体の調整をしっかりと行ってくれ。予定時間通りに飛ぶぞ。」

沢村は2人に今日の予定航路付近のチャートを手渡した。

「では、お互いの無事を。」

「了解!!」

3人はピシッと敬礼を行うと、各々の機体へと向かって歩き始めた。五十六は蓮の花が描かれた機体へと向かうが、沢村と藤沢の機体にも個人マークが書き加えられている。

沢村が桜の花で、藤沢が流星だ。沢村は一番好きな花だから、藤沢はなんとなく飛行機に合いそうだったからつけたと聞いている。

五十六は2人の機体を見つつ、自分の機体によじ登った。既に整備兵が操縦席に入って調整を行っていた。

整備兵は先日やってきたばかりの自分と同年代の平賀三等兵曹（伍長）だ。

「平賀三等兵曹、機体の調子はどうだい？」

平賀は振り向いて言った。

「エンジン、機体共に異常は見られません!!燃料は満タン。機銃も満載にしておきました。」

その言葉を聞き終えると、五十六は一度機体から降りて機体の周りを一回りしてみる。確かに見る限り不調などはなさそうであった。

それが終わると、もう一度翼によじ登った。

「代わってくれ。」

「はい。」

平賀が操縦席から這い出し、そこへ五十六が座る。座ったところで、腕時計を見る。0500時を指していた。

「後30分か。」

五十六はエンジンの温度計や回転計をしてみる。今のところ正常を指している。その他の計器も異常なさそうだ。

計器の確認が終わると、五十六は無線機のスイッチを入れた。

「隊長、高野です。機体、エンジン共に異常なしです。暖機運転をこのまま続けますか？」

まだ出撃予定時刻まで30分ある。それまで暖機運転を続けるのは燃料の無駄であるように感じたのだ。

返事は直ぐに返ってきた。

「そうだな。よし、10分だけ切ろう。0515に再起動だ。」

「了解!!」

五十六はエンジンのボタンを切にした。

徐々にプロペラの回転数が落ちていき、やがてパラパラという音を立てて完全に回転が止まった。見ると、沢村と藤沢の機体もプロペラを止めている所だった。

エンジンの停止を確認すると、五十六は先ほど沢村から渡された航空チャートを開けて見る。昨日の会議で確認したとおり、最短ではなく少しずつ地形確認を行いながら飛ぶ。だが、その迂回航路上にも特に高い山とか気流の悪い場所は無いようだ。

チャートを一通り見て、時計をもう一度見る。時刻は0514だ。

「そろそろかな？」

顔を上げて沢村達の方を見る。もう大分明るくなっているので2人の姿は見えた2人とも時刻を気にしているようだった。

と、その時無線が入る。

「ようし、全機エンジン再始動!!」

沢村が言い終わる前に五十六は前を確認する。整備兵はいない。そしてエンジンのスタータースイッチを入れた。先ほどの余熱があったおかげでエンジンは機嫌よく回った。プロペラの回転計と温度計が上がっていく。

ババババ・・・

再び爆音が飛行場に鳴り響いた。他の2機もエンジンをスタートさせていた。

出発まで後15分。それまで暖機運転を続ける。その間に五十六は朝飯を頬張り始めた。そうして暇を埋める。

そして、弁当を全部平らげた頃に時計をもう一度見る。出撃予定時刻2分前だ。

五十六は飛行ゴーグルを下ろしてベルトをかける。後は隊長からの発進の合図を待っただけだ。

そして1分後。

「ようし、離陸するぞ。俺から順番に続け。」

五十六は両手を振った。整備兵がそれと共に車輪止めを外す。そして他の2機の動きに注意する。機体はいつでも動き出せるのでブレーキやエンジン出力に注意する。

先頭の沢村機、2番機の藤沢機が相次いで離陸していく。それを確認すると、五十六はブレーキを緩めて機体を前に進める。駐機場から滑走路に入る。そこで、管制塔に最終発進許可を確認する。

「管制塔、発進準備完了。発進の許可を願う。」

「了解、発進を許可する。貴機の武運を祈る。」

「ありがとう。」

管制塔との交信を終えると、彼はエンジン出力を一杯に入れた。機体がグングン加速していく。そしてプロペラ機である「飛燕」はかなり短い距離で空中に浮かび上がった。

空中に浮かんだ所で、素早く脚を閉じて風防を閉める。

昇ったばかりの朝日に照らされながら、彼の機体は上昇を続ける。既に先発している2機は高度を充分に取って、飛行場上空をグルグル旋回して五十六が上昇してくるのを待っていた。

五十六がその中へ加わると、直ぐに無線連絡が入った。

「ようし、揃ったな。ではこれより小摩木へ向けての飛行を開始する。いつもどおり3機V字編隊を組んでいくぞ。」

この場合、五十六の配置は逆V字の左側だ。

「了解!!」

こうして、彼らの空の旅が始まった。

戦争中ではあるが、空に敵はいない。殆ど遊覧飛行と同じである。五十六は飛行ゴーグルを外すと、朝日をみた。

「うわああ!!」

所々雲が浮いているが、それがより一層朝日の美しさを引き出しているかのようにだった。

かつて真珠湾へ向かって飛んでいった日本海軍攻撃隊隊長の淵田中佐は昇る朝日を見て、「まるで軍艦旗やな。」と言ったと聞いている。それは今五十六が見ている光景そのままだった。

その光景に、五十六は心が穏やかになっていくのを感じていた。そして今自分が何故ここにいて、何故飛んでいるかさえ忘れてしまふかのようだった。

空は美しく、どこまでも広がっていた。

予想外の仕事 出発編（後書き）

御意見・御感想などをお待ちしています。

予想外の仕事 到着編

飛行は順調だった。気象予報通り空は晴れており、飛行を阻む雨雲も雷雲も乱気流もなかった。

巡航速度350kmで飛ぶ。搭載されているアリソンエンジンは不調もなく、一定のリズムを刻んで回っている。

高度は3000m、そこまで寒くはないし酸素マスクが必要な程高くもない。快適その物の飛行である。

綺麗にV字編隊を作って飛ぶ3機は、時折針路を変更する。出撃前に打ち合わせしていた地理把握のために迂回コースを取るからだ。

幾つかの集落や池、川を確認しそれらを地図と照合しさらには直接頭に叩き込む。直ぐに覚えなければいけないのは簡単ではないが、戦闘に比べれば遥かに楽な作業である。

そうした比較적인んびりした飛行を続けること凡そ1時間、遠くの方に海が見えてきた。目的地である小摩木の町は海沿いの町であるからもうすぐ到着である。

すると、沢村機から無線連絡が入った。

「沢村だ。全機高度1000まで降下。右10度変針。」

五十六は言われたとおり、操縦桿を少し前へ倒し、さらにフットバーを軽く動かして右へ変針する。

1分ほどして、前方5kmぐらいに飛行場と思われる整地された場所が見えてきた。

「全機へ、1度飛行場上空を通過するぞ。お客さんも見ているはずだから綺麗に決めるぞ！！速度そのまま、直進！！」

五十六は機体を操縦しながら、下の様子を見た。滑走路はおよそ800mの長さであろうか、単発機がギリギリ下りられる長さだ。その滑走路の一角に、天幕が張られ多数の人間が集まっているのが見えた。

その上を、3機は通過する。

「ようし、では着陸するぞ。万が一に備えて一機ずつだ。」

五十六は一端機体を水平にして、飛行場上空をグルグル旋回するコースに入った。眼下では、沢村大佐の一番機が滑走路への着陸コースに入った所であった。

沢村機は綺麗に着陸を決めた。続いて2番機の藤沢少佐機もそれに続いた。そしていよいよ五十六の番である。

「ここは一発で綺麗に決めないとな。」

自身を奮起し、彼は高度を落として着陸コースに入った。エンジン出力を徐々に絞って速度を落としながら降下する。フラップを出し、さらに脚を降ろす。

スピード計と高度計に注意しつつ、機体をしっかり滑走路の中心線上に乗せた。

高度とスピードが落ちていく、そして滑走路の端を通過したときには高度5mにまで落ちていた。

「よし。」

彼はここで一気にスピードを失速させて機体を地面につけた。機種を上向きにしての綺麗な3点式着陸であった。

滑走路に脚が着くと、エンジン出力をさらに落とし、ブレーキを掛ける。ここでブレーキを一気に掛けると機体が前につんのめるので要注意だ。もちろん、五十六はそんなへまはしない。見事滑走路の中ほどで機体を静止させる。

「ふう。」

無事着陸が成功した事に安堵する五十六。しかし、すぐに機体を先に着陸した藤沢機の隣まで移動させる。そして、ほぼ3機が横一列にピタシ並ぶよう止めた。

エンジンを完全に止めると、ゴーグルを外して風防を開けて外へと出た。ちなみに、車輪止めがないため、今回は機内に積んできていたそれを持ち出す。

「こっちだ高野!!」

機体から降り、車輪止めをはめると直ぐに沢村に呼ばれた。3人は機体の前に並ぶと、集まっていた皇国軍の将官たちに向かって敬礼した。

「沢村大佐他2名、ただ今到着いたしました。」

すると、一人の將軍らしい中年の男性が一步前に出て答礼した。

「御苦労。私は皇国陸軍西部方面軍總司令官の本宗一大將だ。諸君らの到着を心から歓迎する。」

その言葉に、内心五十六は少し驚いた。目の前の本大將は日に焼けたつきも遅しく精悍な印象であるがどう見積もっても歳は40代前半だ。大將にしては若すぎる。

「これが君たちが異世界から持ってきた飛行機かね？」

本大將は「飛燕」を見ながら言った。

「そうです。」

沢村が短く応える。

「先日敵補給基地を破壊したというが、どれほどの性能を持っているのかね？」

「最高速度は約600km。航続力は1500km。武装は20mm機関砲1門に加えて127mm機銃2基。加えて約360kg分のロケット弾や爆弾を搭載できます。」

「ふむ。」

本大將は機体を一回りしてみる。時折機体自体に手を触れる。

「確かに・・・この時代の代物ではないね。」

興味深げに言うその顔は、非常に知的な印象を周りの人間に与えた。

「まあまた詳しく話を聞こうか。それではまず勲章を授与しよう。福井中尉！」

彼は副官らしい将校を呼んだ。

「彼らを案内したまえ。」

「は！皆さんこちらにどうぞ。」

そう言つて、福井中尉は3人を天幕のある所まで案内した。

勲章の授与式は意外に早く終わった。本大將が簡単な言葉を述べた後、3人にそれぞれ勲章を授与した。

授与された勲章は桜の花を模った金色の物で、金鷲第2級勲章という物であった。ただし、異世界の人間である五十六にはこれがどれほどの価値がある物なのかはわからなかったが。

とにかく、そんな感じで勲章授与式は終わったが、その後起き上がった事が五十六たち3人にとっては大変であった。集まっていた将官から兵までが「飛燕」の前に集まって説明を求めたのだ。

これには五十六も辟易してしまった。一人の質問に答えると、また別の人間が質問の嵐を浴びせてくるのだ。しかも、機械や飛行機の概念に乏しいこの世界の人間には一つ一つ丁寧に言わなければい

けなかったことも、苦勞を倍加させた。

こうして質問をさばいている内に、正午を過ぎてしまった。ようやくそこで質問攻めは終わり3人は支給された食事を食べる事が出来た。

3人が黙々と食事をしていると、本少将が副官の福井中尉を連れてやってきた。

「いや諸君。御苦勞。大分手間を掛けさせてすまなかったね。」

その言葉に、沢村が答えた。

「いいえ、我々こそこの度は勲章授与という榮譽をいただけたのです。これくらいすることは当然です。」

「そうかね。しかし、君たちは異世界から来ていると聞くと、まるで昔からの仲間のような気がするよ。」

本大将のその言葉に、五十六は以前自分自身そんな感情を持ったことを思い出した。

（俺たちがいた日本とこの旭日皇国。地理や歴史は違うけど、人種的、文化的には大分似通っている。そう言うところにお互い仲間意識を持つのかな？）

ここで五十六は思い切った行動にでた。先ほど気になった事を聞いてみる事にしたのだ。

「ところで本大将殿は大分お若く見えますが、失礼ながらお歳はい

くつでしょうか？」

「おい、高野！」

沢村が叱責するが、本は笑って言った。

「良いんだよく言われることだ。私の歳は……」

そこまで本が行った時、彼らの元へ遠雷のような衝撃が響いてきた。

予想外の仕事 到着編（後書き）

御意見・御感想等お待ちしております。

予想外の仕事 戦闘開始編

「なんだ？」

五十六が呟いた数秒後。ズシーンという地響きが伝わってきた。明らかに何かが落ちて爆発した物である。

「これは？砲撃か？」

沢村が立ち上がって言った。すると、1人の兵士が天幕の中に駆け込んできて本大将に報告した。

「報告します！アルメディア軍戦艦が我が軍の沿岸砲台を砲撃中。現在砲台軍は応戦を行っています。」

その言葉に、本大将が青ざめる。

「何だと！何故そこまで接近を許したんだ！？水軍（旭日皇国では海軍を水軍と呼ぶ）の哨戒網は何をしていたんだ！！」

「それが、ここ数日天候の悪い海域があったようで。」

どうやら天候不順の海域を突破されらしい。五十六たちの元いた世界ならレーダーが発達しているから、今回のような本土沿岸に敵を発見できぬまま近づけることなど有り得ない。しかし、日露戦争の時も東京の目と鼻の先にロシア軍の巡洋艦が現れ、貨物船を襲ったという実例があるように、レーダーや無線網、航空機が発達する以前の時代にはこういうことが起こりえた。

「ええい、一番近い海軍の艦隊は？」

「北100km地点に巡洋艦を中心とする第6艦隊がいますが、とても今から知らせては間に合いません。」

「そうか・・・仕方あるまい砲台に全力で反撃をさせろ！！」

本大將はそう命じると、副官を伴って天幕から出て行った。しかし、その沿岸砲台からの砲撃音らしき音は散発的にしか聞こえてこない。

「大丈夫でしょうかね？」

「わからん。」

五十六の質問に素っ気無く答える沢村。

数分ほどすると、沿岸砲台からの砲撃音はほとんど聞こえなくなってしまった。逆に、敵の砲撃の着弾音らしき物は徐々に近づいてくるような感じがした。

「隊長、出た方が良くありませんか？」

藤沢が意見具申する。

「ううん・・・だが攻撃に出たら帰りの燃料が恐らく不足する。それだけは避けたい。もう少し様子を見てから判断しよう。」

だが、事態は悪い方に進んでいるようだった。着弾の衝撃はさらに大きくなり、さらに天幕の外を走り回っていた兵士の姿も見えな

い。そして。

ズシーン!!

先ほどまでとは比べ物にならない衝撃が彼らを襲った。

「今の相当近かったです!!」

五十六が叫ぶ。今までに爆発は何度か経験していたが、砲撃はそれとは違うレベルの威力があるようだ。彼の中に自然と恐怖が湧いてくる。

「隊長、機体が気になります。一端出ましょう!!」

藤沢が叫んだ。

「わかった。」

3人は一斉に天幕から飛び出し、機体がある方へと向かった。

幸い、機体は着陸した時のままの状態でちゃんと無事に並んでいた。

「よかった、機体は無事だ。」

五十六が安堵の息をつくが、それがすぐにぬか喜びであることがわかった。なぜなら、直後にヒューンという空気を切り裂く音が聞こえてきたからだ。

「伏せろ!!」

沢村の叫びと共に、五十六はその場に伏せた。そのコンマ数秒後には、背後から凄まじい爆発音と爆風が彼に襲い掛かった。

「うひゃあ!!」

爆風が収まり、恐る恐る顔を上げて後ろを見ると、先ほどまで自分たちがいた天幕が消え、そこにポツカリ穴が開いていた。

五十六は死の恐怖を感じた。

「クソ、こうなったらやむえん。2人とも飛ぶぞ!!自分の機体が無事かどうか確認しろ!!」

沢村の言葉と共に、3人は自分の機体目掛けてダッシュした。機体はまだ直撃弾は受けていないらしく、無事に並んでいた。

五十六は自分の機体に行くと、まず車輪止めを外した。そしてそのまま急いでコックピットに入り込み、まず帽子をつけた。

「回ってくれよ!!」

そう願いながら、エンジンのスターターボタンを押した。

ヒューン・・・バババ・・・

エンジンは無事に回り始めた。

「やった!!ようし。」

彼はブレーキを解除して機体を進める。今は滑走路とは逆向きに頭を向けているため、急いで回答する。この動作は失敗すると、そのまま制御が利かずグルグルその場で回り始めてしまうので、注意が必要である。

幸いそのような事は起きず、彼の機体は無事回答を終えた。すると、頭につけた無線機から沢村の声が入った。

「高野！先に上がれ！！」

見ると、2人の機体はようやくエンジンを回した所であった。五十六は言われたとおり機体を先に進めた。

滑走路はまだ被弾してないが、いつ砲弾が降ってきてもおかしくない状況である。五十六は急いだ。

滑走路に入ると、スロットルを全開にして滑走に入った。砲弾が当たらないか気が気でなかったが、なんとかそのまま離陸する事が出来た。取りあえず一安心である。

だが、後続の2機が同じようにいくとは限らない。高度を上げて旋回しながら五十六は2人が離陸してくるのをじっと見守っていた。幸い、2人も無事に飛び立つ事が出来た。

「良かった。」

高度2000mまで上がって3機が揃うと、すぐに無線が入った。

「こちら藤沢。隊長、どうします？このまま基地に帰りますか？」

「そんな訳にはいかない。我々の同盟軍が攻撃を受けているんだ。助けがないわけにはいかない。ロケット弾で敵戦艦の装甲を打ち抜けるかは不安だが、やるだけやろう。一か八かだ。」

沢村の言葉に、五十六も腹を決めた。

「了解！派手に行きましょう。」

「これより我が小隊は敵、アルメディア軍戦艦攻撃へ向かう！！」

3機は翼を翻し、海岸線に向かった。すると、すぐに沿岸砲台がやられているのか、黒煙の柱が何本も見えてきた。

それを見送りつつ、五十六は海上を凝視する。

「いた！10時方向、距離5000だ！！」

五十六はその方向に目を向けた。そこには、数本の船からでる煤煙の柱と、海上に残された航跡が見えた。

「これより攻撃を開始する。一回目は索敵のために通過するが、敵の反撃がないとも限らん。充分注意せよ！！」

「了解！！」

3機は敵艦目掛け、降下を開始した。後に小摩木沖海空戦と呼ばれる戦いの始まりである。

予想外の仕事 戦闘開始編（後書き）

御意見などをお待ちしています。

予想外の仕事 終結編

「目標敵艦5!!」

先頭を飛ぶ沢村機から無線連絡が入る。確かに、海面に見える航跡は計5つだ。内3つはかなり小さいから駆逐艦か水雷艇のようだ。この時代はまだ水雷艇と駆逐艦の区別はあいまいであった。

そして残り二つはどうやら巡洋艦か戦艦のようだ。今までに艦艇の航跡を見たことがない五十六にはそれ以上の識別は不可能だった。

「全機高度を1000まで降下!」

3機は綺麗に単縦陣を作って降下していく。そして降下すると敵の姿がより一層鮮明になる。

5隻の敵艦は横1列となって進んでいるが、内両端の船はやはり小型艦艇だ。そして中央の大型艦2隻は1隻が少し大きいから戦艦のようだ。

「全機へ、1回敵艦隊上空を通過する。ただし対空火器を持っている可能性もなくはないので注意せよ!!」

一応日露戦争時の日本戦艦も機関銃を積んでいた。ただし、その目的は水雷艇を掃射するためであった。しかし、もしそれが空に向けて撃たれたらやはり脅威となる。慎重に慎重をきさなければいけない。

そして敵艦上空を最大速度で通過する。幸い反撃はなかった。

敵艦の形式を見て、少しばかり五十六は違和感を覚えた。確かに古めかしい戦艦ではあるが、日露戦争時の物ではなく、その少しあとに竣工した「筑波」級戦艦に似ている印象を受けたのだ。

（まさか、こちらも科学の進歩が進んでいるのか？）

もし船舶工学の面でも科学の進歩が進んでいるなら、これまた厄介である。なにせ、日露戦争時代は戦艦の主砲は口径は30cm砲で、4門程度しか載せていなかった。ところがこれが第一次大戦になると口径は最大で38cmになり、門数も2〜3倍に増えている。

（ま、そんな詮索は後だ、今は目の前の敵を叩かないと。）

「こちら沢村。これより攻撃を開始する。目標は中央の戦艦だ。沈められなくても、損傷を与えるだけで充分だ。よって攻撃は緩降下で行う。」

緩降下爆撃は、通常急降下爆撃が30度から45度の角度行うのに対し、それよりも遥かに緩い角度で行う爆撃方法である。急降下爆撃に比べて降下速度が遅くなるため、発射するロケットの装甲貫徹力も減少する。しかし、戦闘機である「飛燕」は過重状態で急降下すると空中分解するかもしれない、であるからこの攻撃方法は正論である。

「全機、ロケット弾の安全装置を解除！機銃も撃てるようにしておけ！」

五十六はロケット弾と機銃の安全装置を解除にする。

「ようし、攻撃開始だ!!」

3機は降下に移った。

すると、向こうもこちらを脅威と見たのか、一斉に回頭する。どうやら回避運動を始めたようだ。だが、この時代の船はいずれも石炭焚きのボイラー艦だ。五十六たち平成の軍艦に比べれば遥かに加速、減速性能は劣っている。おまけに最高速度も20ノットが関の山だ。逃げ切れる筈がない。

そしてまず隊長の沢村機が攻撃を開始した。

彼はロケット弾を4発一斉発射した。ロケット弾は撃ちっぱなしの直進式ではなく、簡易ながら熱探知方式だ。そのため、ロケット弾は見事にその戦艦に命中した。

「やった!!」

五十六は喝采した。しかし、戦艦は火災を起こしたようではあるが、今だ走り続けている。

「やっぱこんな小さなロケット弾じゃだめか？」

つづいて、藤沢機が攻撃を開始した。彼も同様に4発のロケット弾を一斉発射した。このロケット弾も全て命中し、戦艦の甲板に閃光が走った。

しかし、火災をより一層酷くしながらも戦艦は平然としている。

「やっぱ沈めるのは高望みかな？」

そう言いつつも、彼は攻撃態勢に入った。ロケット弾の発射を4発同時モードに設定し、一気に降下する。

「恨むなよ。これが戦争だ。速度650km。距離800! ようし、照準機のセンターに捉えた。容易、撃て!」

発射ボタンを押すと、ロケット弾が発射された。しかし、その内の1基は故障したのか、点火しなかった。そのため、戦艦に向けて飛んでいったのは3発だけであった。

それを見た五十六は「ち!」と舌打ちした。

しかし、次の瞬間彼は信じられない物を見た。

ズドン!!

突如として戦艦が大爆発を起こしたのだ。そして行き足を止めた。

「ええ!!」

彼は知らなかったが、艦砲射撃中に空襲を受けた敵艦は弾薬を弾薬庫から上げて、砲に装填していた状態だった。そのため、副砲や速射砲の弾薬ケースが甲板上に並び、主砲には弾と装薬が砲身に入っている状態だった。

先の2機の攻撃では、被弾したのは煙突や副砲甲板であった。副砲の弾薬が小爆発を起こした物の、幸いにも艦の機関や艦体自身に致命傷となる傷ではなかった。

しかし、五十六のロケット弾は後部主砲塔の砲身に命中し、そこで炸裂した。そのため、砲身内に残っていた装薬と弾が誘爆し、それによって大爆発が起きたのだ。

また、先に命中した2機のロケット弾の煙突への命中も、機関室への煙の逆流を招き、それが元で機関兵がバタバタと倒れ制御できなく、爆発と同時に止まってしまったのであった。

「嘘だろう!？」

彼自身信じられなかった。わずか3機のちっぽけなロケット弾で戦艦が大破するなんて、通常ありえない。

「隊長、どうします？」

藤沢が沢村に指示を求めた。

「これ以上は攻撃不可能だ。機銃じゃさすがに効果ない。それに、あの戦艦は大破だ。もはや戦闘不能だろう。我々の攻撃意図は消失した。これより我が隊は小摩木飛行場へ帰還する。」

「了解!！」

3機は翼を翻して帰途に着いた。余談だが、この戦艦結局その後航行不能になったため、皇国に拿捕されぬよう自沈処分されている。つまり、彼らはたった3機で戦艦1隻を撃沈したわけであるが、彼らがその戦果を知るのは随分後の話だ。

それよりも、帰還した3人は小摩木に戻るなり再び大歓迎を受けた。敵戦艦を大破させた光景は沿岸監視所から見えていたので、そ

の報告がすでもたらされていたからだ。

こうして彼らは英雄として扱いを受け、この後丸一夜宴会に付き
合わされる羽目になった。

予想外の仕事 終結編（後書き）

御意見・御感想などをお待ちしています。

不安と希望

敵戦艦撃沈という、思いがけない戦果を上げた五十六たちは、その翌日基地に帰還してきた。隊長の沢村は戦闘で燃料を消耗したため、当初は帰還できるか不安視していたが、なんとか3機とも辿り着くことが出来た。

しかし、帰る早々代理指揮官の橘から昨日の攻撃で起きた頭の痛い問題を聞かされた。なんと未帰還機を1機出してしまったのである。これは大きな痛手であった。なにせ飛行機自体が20機もないのだ。1機を損失すると、すぐ大きな戦力ダウンに繋がってしまう。

そしてさらに頭の痛い問題となったのが、この未帰還の理由が戦闘によるものではなかったことだ。なんと事故であった。若いパイロットが低空攻撃後に引き起こしに失敗してそのまま地面に激突したのがことの真相であった。

「申し訳ありません。自分がついていながらこのような事態を引き起こしてしまいました。」

橘は深々と沢村に頭を下げた。

「いや、君の所為ばかりではない。練度に不安があるとわかっていながら、出撃を強行した自分にも責任がある。死んでしまった者は生き返らんだ。今後は再発防止に全力を尽くすしかない。」

とは言つものの、その場に付き添った五十六は大きな不安を口にした。

「しかし隊長。これで隊員の士気を考えるうえでマズイ事態を起こしかねないのでは？」

「俺もそれを考えていた。」

五十六の言うマズイ事態とは、隊員の士気の問題であつた。この部隊は一応一人一人階級が決められ、隊長などの役職も定められた軍隊としての体裁を取っている。しかしながらその実体は傭兵集団に近い。

傭兵は金で雇い、直ぐに数を揃えられるのがメリットといえる。しかし、その分本来の軍隊が供える筈の忠誠心などは低い。かつて中華民国が共産党軍と戦つた際も、数あわせのためだけに軍に編入した兵士が、いざ戦いとなると遁走した例もある。この部隊でも同様の事が起きないとも限らない。

おまけに、ここは異世界の世界である分忠誠心や愛着心が湧かない事に加えて、ホームシックの心配もある。隊の士気の低下に拍車を掛け兼ねない。

軍隊はただ戦えば良いのではない、それを支える兵たちの士気も重要な要素である。

「とにかく、死亡したパイロットについては向こうの世界に残つた家族に対してなんらかの通知を送らねば成らないし、出来る限りの遺品も届けよう。それと葬式も挙げてなければな。隊員の士気については、追々考えていくしかあるまい。」

結局そうした指針が決まり、その日のうちに隊による仮葬儀が行われた。五十六はその会場で、隊員の士気低下を肌で感じることに

なった。

（こいつはやばいぞ。）

翌日から訓練飛行は再開された。しかし、恐怖心が芽生えてしまったのかパイロットの中にノイローゼ者が続発した。一応部隊には医者がついていたが、そのカウンセリングも間に合わないぐらいの物となった。

幸い昨日の補給線寸断と戦艦撃沈によって、皇国軍からの出撃要請はなかったが、もしこのまま状態が続けばいざという時戦えなくなる。

「やむえん。重症者は元の世界に送還しよう。」

結局、3人が送還となった。これでパイロットはさらに減ってしまった。

そんな状況下でありながら、藤沢や五十六といった中核パイロットはとにかく新米パイロットの練成に努めた。やはり実戦経験は大きな経験となったらしく、パイロットたちの練度向上はめざましい物があった。

しかし、それだけでは問題の解決にはつながらなかった。この世界でパイロットに志願した真理奈を含めても、パイロットの抜けた穴を埋めるには程遠い。

その真理奈は基地にやってきて1週間しかたっていないのに、すでに簡単な飛行訓練に入っている。とにかく物覚えがよく、飲み込みが早い。そんな彼女を基地の人間は天才と呼んでいた。

そして基地に帰ってから4日目、五十六は他のパイロット4人とともに司令官室に呼ばれた。

「明日神の路を通って一端海鷲島に戻るぞ。そこで機体を受け取ってこちらに空輸する。」

受けた命令はそれだけであった。

「先輩、新しい機体ってなんでしょうね？」

五十六の元で教えを受けている松内一等飛行兵曹が司令官室から出るなりそう言った。彼は若干16歳。身長175cmの大男で隊内随一の体力を持っている。14の時に両親が借金をして失踪。その後親族をたらい回しにされたあげく孤児院で暮らしていたのだが、その類稀なる身体能力を河口に見出されスカウトされた経歴を持っている。

「さあわからん。けど河口さんがいくら宝石商の金持ちとはいえ、これだけの人数の飛行機を一気に揃えられるものかな？」

五十六にはそんな疑問があった。一体どこから彼は飛行機を調達したのか。これまでの機体は払い下げや新規に建造された機体ばかりであったが、それを個人で20機近く揃えるのだって並大抵のことではない。今回さらに数を揃えたのだから、不思議と思わない方がどうかしている。

翌朝、仲間達と共に五十六はトラックの荷台に乗って基地を出発。50km程離れたところにある、こちら側の神の路の入り口から中へと入り、そのまま海鷲島へと着いた。

「よう、待ちかねておったぞ。」

トラックから降りると、そこには河口が待っていた。

「今回は一体どんな機体を集めてきたんですか？」

「まあ自分の目で確かめてくれ。こっちだ。」

そうして案内された格納庫の中をみて、五十六は仰天してしまった。

「な！こいつは零戦の52型じゃないですか！！」

なんとそこには、ピカピカに整備された零戦52型がつごう5機用意されていた。外見から見る限りオリジナルのようである。

さらに、奥のほうには『赤とんぼ』の愛称で親しまれた複葉の93式中間練習機が2機置かれていた。

そこで五十六はかつて河口が言った言葉を思い出した。

「もしかしてこれは過去から持ってきたんですか？」

すると、河口はニヤツと笑い言った。

「その通りだ。ついに飛島博士が時空転移装置の改良に成功してね。時間旅行が可能になった。まあタイムパドクスの心配もあるから、今の所集められたのはこれだけだ。」

最初は半信半疑だったか、目の前の現実には五十六は内心驚き、そして歓喜したのであった。

不安と希望（後書き）

御意見・御感想をお待ちしています。

基地移動

河口から機体を見せられた3日後、五十六は3機の零戦と2機の赤とんぼをつれて基地へと帰還した。

零戦を5機の内3機しか持つてこれなかったのは、2機がいずれも機体不調を抱えていたためだ。

実は太平洋戦争中の日本の工業力は現代に比べれば精度は低く、品質も遥かに劣っていた。しかも、熟練工員が作ってもそうであるのに勤労働員の学徒や女学生が作っているのだから、出来の悪い機体が多いのは当たり前であった。

河口が持つてきた零戦はいずれも52型で、戦争後期に作られた機体である。そのため、エンジンや機体に致命的な問題を抱えている機体があっても不思議ではなかった。

戦闘に耐えられないと判定された機体の内1機はエンジンの部品が複雑な工作であったために、飛行中トラブルを起こす可能性が非常に高かった。もう一機は主翼の工作が不完全なために、空中分解を起こす可能性があった。

結局、この2機はパーツ取り用にされてしまった。これは大きな戦力ダウンであるが、背に腹は変えられない。

五十六たちは残った3機の整備に全力を尽くした。

まずエンジンの部品で劣化または品質に劣る物を交換した。特に点火栓のプラグやパイプの継ぎ目部分は現代の部品で代用できる部

分は全て交換した。こうすることで油漏れやエンジン起動時の不調などを防げるはずである。

また、無線機や計器類も最新式の物に交換された。これで飛行時の操作がかなり改善されるはずであった。

そして最後に燃料を現代の高オクタン価の物に入れ替える。

オクタン価とは燃料の不純物が混ざっている割合を指す物で、数値が高いほど高品質である。旧日本海軍は92、旧陸軍は87オクタン価を標準に定めていたが、同時期の米軍機は120オクタン価だったことを考えるとかなり低いのがわかる。

余談ではあるが、戦後旧日本軍機をテストした連合軍の数値は、日本時代の数値を遥かに上回っていたとされている。

こうして整備された零戦は予想通り高い性能を引き出す事が出来た。そして五十六はこの零戦小隊の小隊長を命じられた。

まだ3回しか実戦を経験しておらず、飛行時間も500時間とお世辞にも長くはないが、他に適任者がいなかったためにこの役職となった。

部下は松内一飛曹と、児玉二飛曹であった。

児玉二飛曹は五十六よりも2歳年上の20歳で、元飛行学校生である。金銭的な事情で退学を余儀なくされた所をスカウトされた口だ。中々明るく冗談も通じるために隊内でも評判の高い男だ。

彼ら3人はこちらに移動すると直ちに慣熟訓練に入ったが、その

期間は非常に短かった。まもなく新たな命令を受けたからである。

「東70 kmにある神海基地に前進せよ!!」

これが沢村司令から受け取った命令だった。五十六に渡された資料によると、神海という街は人口3万ほどの小規模都市で、最近になってアルメディア軍から取り返した街である。前線からは約50 km。基地はその郊外に設けられたという。

「前線から近すぎやしませんか？」

それが五十六の疑問であつた。前線から50 kmなら、大規模な侵攻があれば直ぐに敵軍が到達できる距離である。さらに、間諜が^{スパイ}潜り込む可能性も非常に高い。そんな土地へ貴重な飛行機を持つていつてよいのかと五十六は考えた。

沢村もこの意見には賛成であつたが、前線が基地から離れているのも事実であるし、折角作つてもらつた飛行場を使わない手はない。

結局説得された五十六は神海基地へ前進する事になった。前進するのは彼が率いる零戦隊と、T6型機2機からなる偵察小隊である。

2日後彼らは神海基地へと前進することとなった。

基地を離れるとき、五十六は名残惜しかった。1ヶ月もいなかったが、彼はこの基地に大分愛着を感じるようになっていた。そして、姫神真理奈と離れることになるのもその気持ちを大きくした。

ほのかに恋心を抱いていたが、ここの所は中々会う事は出来なかった。お互い忙しかったのだ。

そんなことを考えつつ、5機は新天地である神海基地へと向かった。もつとも、70kmという距離は巡航速度300kmのプロペラ機でも指呼の距離である。20分もあれば着いてしまう。

神海基地を視界に納めたとき、五十六は絶句してしまった。

「これが飛行場だつて？」

無線から松内の驚きの声が入ってきた。それほどまでに簡素な基地であつたのだ。簡単に整地された1000m級の滑走路に、吹流しと指揮所と思われる掘つ立て小屋が1棟だけ。格納庫や兵舎らしき物は見当たらなかった。

「これはとんでもない所に来てしまいましたね。」

着陸後児玉が言つた言葉に全員が頷いてしまった。元いた基地は草原の中にあつたが、格納庫も兵舎もあつたし、指揮所もプレハブとはいえそれなりの物が整備されていた。しかしここはそれに比べるとあまりにもお粗末な基地設備しかなかった。

雨になつたら滑走路は泥だらけに成るだろうし、機体もパイロットもびしょ濡れになつてしまふだろう。

五十六は沢村に騙された思った。

もつとも、そう思つたのは最初の内だけであつた。この後皇国軍の兵士から宿舎として案内されたのは、接収された旅館であつた。そのため広い風呂に上手い飯、フカフカの布団にありつくことが出来た。さらに、街に近いために、これまでに出来なかった買い物や

ら人との交流が制限つきながら出来るようになった。

五十六が街に出て驚いたのは、この国が本当に日本に近い文化を有している事であった。話す言葉は全く同じで、貨幣の単位も同じ、違う所といえば、やはり陸続きの国であるために、日本にはない植物や動物がいる程度であった。

また基地機能の貧弱さも、その後新たにプレハブ式の建物や工作車両で整備され、1週間後には滑走路は完全に舗装され、機体を覆う屋根も完成した。

そんなわけで、新基地への不満もいつのまにか自然消滅し、五十六たちはじつくりと零戦の慣熟飛行訓練を行う事が出来た。そして新基地移動から10日後のこと、五十六に戦艦撃沈の褒賞としての1階級特進の辞令と、命令書が届いた。

基地移動（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

出撃前夜

届けられた命令書には、強行偵察任務を行うように書かれていた。

この戦争が始まる前、旭日皇国の隣にはトルアン王国という小国が存在したが、その国はアルメディアの侵攻を受け、現在は併合されている。アルメディア軍はこの国を通って旭日皇国各地に進出した。

現在戦線は膠着しているが、このトルアン王国にアルメディア軍がどれほどの軍を進出させているかが全くもってわからない。一応スパイを送り込んでいるようではあるが、情報は中々入ってこない。そこで、空からの偵察となった。

既にこちらの世界に来て2ヶ月あまり経つ。敵もバカではないかなんらかの対空兵器を配備していてもおかしくない。そこで、通常のテキサンではなく戦闘機の零戦にカメラをつけて強行偵察を行うこととなった。

早速五十六は地図を見て作戦の検討に入った。そして偵察する場所を決めた。ニムルという旧国境線から40km程入った所にある街だ。

人口5000人ほどの小さな町であるが、付近は盆地であり荒地が広がっている。補給基地等を設営するにはそれなりに申し分ない立地条件である。

行き先を決めると、五十六はパイロットの選抜をした。偵察任務であるから全機出動の必要はない。零戦2機での出動とした。

「自分が行きます」

パイロットを決めようとした時に真つ先に手を上げたのが2番機の松内であつた。しかし、五十六はこれを却下した。

松内は隊で2番目に上手い戦闘機パイロットである。彼が万が一落ちるような事になれば隊にとって計り知れない打撃となる。

結局2番機パイロットは偵察隊のパイロットである大河飛曹長となった。

大河飛曹長は32歳の脱サラパイロットで、軽飛行機のライセンスを持っていた。リストラされていた所を河口にスカウトされた。しかし体力的な問題から戦闘機ではなく偵察機に回された。

14歳も歳の差があつて階級は2つも五十六の方が上だが、大河は素直に従ってくれた。五十六も人生経験豊富なこの先輩を色々と頼りにしていたので関係は良好だった。

人選が決まると、五十六は早速出撃準備に取り掛かった。まずそれぞれが乗る零戦の主翼機銃を1基ずつ降ろし、代わりにカメラを装着した。

また、燃料は満タンにせず往復分プラス予備として戦闘20分分の燃料だけを入れた。これは万が一被弾した場合に備えての処置である。

こうした下準備が終わり、出撃を控えた夜。五十六の部屋を大河が訪れた。

「失礼します。」

「あれ、大河さんどうしました？」

突然の来訪に五十六は少し驚いた。

「出撃前夜です。折角だから外にでも食べに行きませんか？」

食事の誘いである。別に予定があるわけではないので、五十六は付き合うことにした。

「ええ、構いませんよ。いきましよう。」

どこで食べるかは大河に任せる事にした。彼が五十六を案内したのは街の外れにある小さな食堂だった。

「へえ、こんな店があつたんですね。気付きませんでしたよ。」

「でしょ、だから穴場なんですよ。味は私が保証します。」

扉を開け、暖簾をくぐると威勢の良い女性の声が響いてきた。

「いらつしゃい、あら大河さんじゃないの。こんばんは。」

店の中は5人も入れば一杯になりそうなほど小さかった。カウンター方式の席が4つほどあるだけだった。客の姿はない。

そのカウンターの向こう側に声の主である女性が立っていた。歳の程は20歳後半という所だろう。整った顔立ちに白い肌。身長は

150cmあるかないかぐらいで小柄である。美人というより可愛いという表現が似合いそうな女性だ。

先ほどの口ぶりからして、大河は何度もここを訪れているようだ。

「こんばんは幸子さん。今日は上司を連れてきたよ。うちの隊長の高野中尉だ。」

大河が五十六のことを、幸子と呼んだ女性に紹介する。五十六は帽子を取って挨拶した。

「空軍中尉の高野です。」

この世界の民間人相手に対しては、五十六たちの身分は新設された空軍軍人とするよう通達が出されていた。

「まあ若い士官さんですね。さぞや優秀な方なのでしょうね。」

幸子はあまりに若い士官に驚きつつも、2人に席に座るよう勧めた。

「ここはテンプラが美味いんですよ。幸子さん、テンプラ定食を2つ。」

「はい。」

五十六は店内を見回した。木造で椅子や机も粗末な作りだ。そして天井の光は蛍光灯ではなく裸電球だ。テレビもラジオもない。しかし、それがまた何か懐かしい感じをかもし出しているように五十六は感じた。

20分ほどして、テンプラが揚がり、2人の前に出された。

「さあどうぞ。」

五十六は出されたテンプラを見た。やはり戦争中であるせいか、日本で良く食べた海老等の高級食材はない。唯一川魚と思われるテンプラがあるだけで、あとは山菜や野菜ばかりだ。

しかし、食べてみると確かに美味しい。なるほど、大河が言った事も過大な物ではなかったようだ。

「美味しいですね。」

「でしょ。ここはテンプラも良いし、うどんやそば、味噌飯も美味しいんですよ。これも幸子さんの腕がいいからですよ。」

「まあ、大河さんはお上手ですね。」

誉められて喜ぶ幸子。五十六はその頬が少し赤みを帯びているのに気付いた。

（もしかしてこの2人出来ているんじゃない？）

そんな予感がしたが、深く突っ込むのはやめることにし。このあと食事を終え、2人が店を出ようとしたとき、幸子が大河に何かを渡していた。そして彼女はこう言って2人を送り出した。

「お二人の武運長久をお祈りしています。」

武運長久。長く武運が続くことを祈る言葉。2人はピシッと敬礼をして、返礼した。

翌朝、2人は偵察任務へと赴く。

「コンタックー!!」

2機の偵察仕様の零戦が滑走路に引き出され、出撃準備に入った。

「大河飛曹長、出撃します。」

「了解。」

朝もやの中、2人は飛び立った。その時、街の小高い丘から赤い布を振っていた女性がいるのが見えた。

その姿を見送りつつ、2人は西へ向かって飛んでいった。

出撃前夜（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

初空戦

出撃して30分。2機は既に旧国境を越えて、旧トルアン王国領に侵入している。恐らくすでに探知されているはずであるが、まだ連絡手段が発達していないこの世界なら例え発見されても致命的な事にはならない。

五十六は地図で地形を確認しながら、目標の敵後方基地へと一直線で進む。そして目標まで5分の地点にまで近づいた。

「大河飛曹長。まもなく目標である。カメラを起動状態にして、各種武装チェックせよ。」

「了解!!」

2機は主翼に装備されたカメラが写せるようセットし、さらに機銃とロケット弾の安全装置を解除した。

機銃を試射し、弾がしっかり出るか確認した。

「カメラ、機銃共に異常なし!」

大河機からの無線連絡が入る。

「ようし。目標まで後2分。」

そして敵補給基地が視界に入ってきた。

「でかい・・・」

敵の補給基地の規模は予想以上に大きかった。自衛隊の駐屯地並の広さがあり、そこに物資が山積みされていた。さらには鉄道の線路を引き込んであるのか、SLが出している煙が何条も空に延びていた。

「ようし・・・敵対空砲火に注意しつつ接近し写真撮影、終了後は機銃掃射とロケット弾による攻撃を行え！！」

「了解！！」

2機は編隊を解いて急降下する。五十六は今回取り付けられた力メラのスイッチに手を掛ける。

大量に積み上げられた物資、動き回る兵隊たち。さらに先日の前線補給基地攻撃で見た戦車が数十台単位で並んでいるのが見えた。

それらを2人は写真に収めていく。もともと、危険でないわけではない。所々で敵が機銃や小銃を空に向けて撃っているのが見えた。その多くがこちらのスピードに追いつけず無駄弾となっていたが、まぐれ当たりする確率だってある。

幸い五十六も大河も被弾しない内にフィルムを全部使いきった。

「中尉、写真撮影終了しました！！」

「こつちも終了した。ようし、ロケット弾と機銃を適当にぶち込んでサッサと帰還するぞ。」

「了解！！」

2人は高度を多少とってから、攻撃を開始した。今回積んでいるのは5機の機銃と2発のロケット弾だ。先ほどは適当にぶち込めと言ったが、やはりある程度効果的な攻撃をするのがベストである。

五十六は狙いを停車中の戦車と列車に定めた。戦車の前線進出を抑えることは大きなメリットとなるし、SLを破壊すれば物資の輸送速度を大幅に抑えることが出来る。

まず戦車の車列に機首を向けた。照準機の中に戦車の姿が入る。五十六は狙いが真ん中に入ったところでロケット弾を発射した。

パシューという音を立てて発射された2発のロケット弾の内、1発は外れたが、もう1発は戦車に直撃し大破させた。ただし、燃料や弾薬を積んでいなかったのか、大爆発はしなかった。

「チッ!!」

思わぬ結果に舌打ちしつつ、五十六は頭を切り替え次の目標に向かった。

基地内に引き込まれた線路上に何十両もの貨車や客車を連結したSLが何本も停車していた。五十六はその内の1両に狙いを定めて機銃掃射を開始した。

ダダダダ・・・

主翼の12.7mm機銃と、機首の7.7mm機銃が発射される。すると、慌てて機関車から乗員が飛び出すのが見えた。五十六にしても無用な殺生はしたくないから、好都合である。

機銃弾はS.Lに命中し、火花を散らした。次の瞬間にはボイラーに直撃したのかその機関車全体が濛々と白い煙に包まれた。これでもう走行は出来ない。撃破1である。

「よし。」

戦果を見届け上昇する。すると、大河機が寄り添ってきた。

「中尉、この辺で帰りますか？」

「そうだな・・・むやみに戦果を欲張る事もあるまい、帰還しよう。」

そう言つて、前方の空を見た瞬間である。彼は空中に10ばかりのシミのような物が存在するのに気づいた。

「何だ？飛行機？味方が後続で爆撃隊を発進させたのか？」

五十六は味方の編隊だと思った。しかし、すぐに大河が否定してきた。

「いえ、そんな予定はないはずです。」

「じゃあ、あれは？」

2人が不思議がつている間にも、その物体は近づいてきた。そして機影が確認できるまでに近づいた。間違いなく飛行機である。しかし、味方ではなかった。

2枚翼に固定脚というかなり古めかしいスタイルだ。そして五十
六にはその姿に見覚えがあった。

「まさか・・・第一次大戦中のニューポールか!？」

ニューポールとは第一次大戦時にフランスの主力戦闘機を作った
会社である。戦後は日本へも機体を輸出している。

そのニューポールに間違いなかった。写真で見たそのままである。

「まさか飛行機がもう出てくるなんて・・・」

戦車を見たときに科学技術の進歩のレベルが違うとは思っていた
が、早すぎる。五十六はその事実をあらためて認識し、うめいた。

「中尉、どうします？逃げますか？」

「ここまで近づいちゃ無理だ。それに敵は帰還針路を防いでいるか
ら逃げるのは間に合わない。戦闘を行うぞ!!」

「了解!!」

2人は初めての空中戦に挑んだ。相手は旧式機だ。こちらが最高
速度が550km以上出るのに対して、敵は200kmが精一杯で
ある。しかも武装もこちらが5挺なのに対して、相手は1、2挺だ。
子供と大人の勝負と言ってよい。

しかし、油断すればこちらが落とされかねない。いちおう相手も
銃を使えるのだから。

12機の敵機は機銃を乱射しながら、がむしやりに近づいてきた。五十六と大河はその機銃をよけながら、敵機とすれ違った。そしてそのまま旋回して後ろにつく。

五十六は照準機の中に入った後方の機体に目標を定めた。

「許せ、戦争だ!!」

発射レバーを握り機銃を発射する。銃弾は目標の敵機に吸い込まれるように命中した。布で出来た機体では、機銃弾は貫通してしまっただけで発火はしない。しかし、5挺の機銃から吐き出される数十発の銃弾を受けては機体を穴だらけにされてしまい、さらにパイロットも負傷する。

その敵機はあっという間にバラバラになり落ちていった。

あまりにも呆気ないほどに撃墜できた。

五十六はそのまま隣の機体にも一連射したが、これは撃墜できぬまま敵機を追い越してしまった。

見ると、大河機も1機を撃墜していた。

2機を撃墜されてしまったためか、敵機は大混乱に陥っていた。もはや編隊としての体をなしていない。

「ようし、今のうちに脱出だ。」

「了解!!」

2機はその高速を生かして戦場を離脱した。そして何事もなかったように基地に帰還した。

初空戦（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

補充機

敵基地への強行偵察に成功した五十六と大河であったが、敵であるアルメディア軍が複葉機とはいえ、飛行機を保有した事は大きな衝撃であった。

「まさかもつ飛行機を実戦に投入してくるなんて。」

五十六は基地の司令官室で昨日の空戦の事を思い出していた。

五十六たちの世界の歴史では、飛行機が本格的に参加した戦争は第一次世界大戦である。この戦争は1914年から1918年まで行われた。

この世界の技術レベルは、当初日露戦争時代の地球と同レベルのはずであった。つまり、飛行機の登場する時代とはおよそ、10年から15年の差がある。

この世界に五十六たちが飛行機を持ってきて実戦に参加するようになったのは、3ヶ月ほど前の事である。

いくら技術レベルの進歩が早くても、五十六たちが飛行機で戦いだした事への対策として飛行機を投入したとは考えがたい。通常飛行機の設計から実戦投入までは、どんなに急いでも1年以上はかかる。つまり、アルメディアはかなり早いうちから飛行機の開発を始めた事になる。

五十六が貰った資料によれば、この世界での動力付き有人飛行機が始めて空を飛んだのは、6年前の事である。その機体はほとん

どライトフライヤーと同じであった。

そこから第一次大戦時の飛行機までは10年近く掛かっているはずである。それがこの世界では半分近くの時間で達成している。

この世界での科学技術の発展スピードが速いことは、戦車をみたりして感じていたことではあるが、ここまで速いとはさすがに想像できなかった。

「相手が布張りで300km以上の遅い機体ならそれほど脅威にはならないけど、それでも数で押し切られたら終わりだよな。」

消耗戦になった戦争では、兵器の質よりも如何に消耗した分を補充できるかが問題にあんる。いくら質が優れていても、数が足りなくて話にならない。

太平洋戦争では、日本の零戦が当初無敵を誇ったが、その後米軍の多少性能が劣る機体でも複数で1機に向かってくるようになる一気に劣勢に立たされた例がある。

「これだけの機体じゃ、抑えきれないよな。」

五十六の元にある機体は戦闘機、偵察機が併せて7機しかない。もし敵が旧式とはいえ複葉機100機で襲い掛かってきたら防ぎきれないかもしれない。飛行機はデリケートな機械であるから、まぐれ当たりの機銃弾で落ちる可能性もなくなるはない。

もし、1機でも失えば戦力は一気に15%も低下してしまう。

「沢村さんに補充機を回してもらえるように打診するしかないよな。」

「昨日の偵察飛行の結果は既に報告してあるが、戦力の増強については言わなかった。五十六は司令官室から出て無線室へと行った。」

「この世界では携帯電話どころか衛星電話も無い。また、この基地には電話線をまだ引いてもらっていない。そのため、五十六たちは持ち込んだ軍用無線機で連絡を取り合っていた。」

「五十六は無線機の電源をいれ、沢村がいるはずの基地にコンタクトを取った。ただし、五十六は必ずしも今回の要請が通るとは思っていないかった。パイロットの育成がまだそこまで進んでいるとは思えなかったからだ。」

「こちら神海基地司令高野、神海基地司令高野、松枝基地、松枝基地聞こえますか？」

「松枝基地とは、五十六たちが最初にいた基地である。」

「はい、こちら松枝基地。」

「すぐに通信手が応答してきた。」

「すまない、沢村司令代行に連絡を取りたいのだが。」

「了解です。しばらくお待ちください。」

「通信手が沢村を呼び出すまでの間、しばらくたなければいけなかった。」

2分後、ようやく沢村が出た。

「沢村だ。何だ高野、昨日の報告なら既に受けているぞ。」

「はい、実は今日は報告ではなく、要請があつて連絡をとらせていただきました？」

「要請など聞かんでもだいたいわかるわ。戦力の増強、特に機体を増やしてほしいんだろ。」

五十六は舌を巻く思いだった。そこまでしつかり見透かされていた。

「だったら、話は早いですね。で、どうでしょうか？」

すると、沢村の返事は少し謝りを含んだ物だった。

「すまない。戦力の不足はこっちも同じなんだ。今の所そっちに回せる戦力は1機もないんだ。猫の手も借りたい思いなのはこっちも同じだ。」

予感悪い方で当たってしまった。

「そうですか。敵が飛行機を使い出したので、少しでも有利に立つために戦力の増強は不可欠なんですが・・・やはりだめですか。」

すると、沢村が予想外の事を言ってきた。

「すまん。しかし、来週になれば1機まわしてもかまわないぞ。」

「え！？回してもらえらる機体とパイロットのあてがあるんですか？」

「ああ。そういうわけで高野、1週間何とか持ちこたえてくれ。出撃を控えろとまではいかないが、あまり戦力を消耗するようなマネだけはしないでくれよ。」

そして、無線は切られた。

五十六は新たに来る補充の機体とパイロットに期待する半面、一体どこから用意するのか気になった。

「こないだ松枝を出るときには、海鷲島で訓練中のパイロットが戦えるまでには2ヶ月は掛かるって沢村司令は言っていたよな・・・
一体どこから用意したんだ？」

気にはなったが、とにかく1週間待つことにした。五十六は戦力の温存と、燃料や弾薬の節約を図るため、攻勢を取りやめ、敵が越境してきた時だけ迎撃する事にした。

もちろん、必要な偵察などは行った。しかし、アルメディア軍がこちらに越境してくる気配はまだ無かった。

一回だけ、敵の偵察機が越境してきたが、単機で複葉機であったため、国境線を越えた途端に撃墜されている。

そして、1週間が経過した。五十六は滑走路に立ち、補充されてくる機体を待っていた。そしてお昼前、東の空に機影が一つ現れた。

「来た！！」

現れた機体は、今五十六たちが使っているのと同じ零戦であった。その零戦は見事な3点式着陸を行い、基地の人間に感嘆の息を漏らさせた。

そして零戦が止まり、中から出てきた人物を見て、五十六は驚いた。

「ひ、姫神さん!？」

補充機（後書き）

御意見・御感想・要請などをお待ちしています。

迎撃戦 上

「なんで彼女が？」

啞然としている五十六の前に、彼女がやってきて敬礼をした。

「申告いたします。姫神真理奈二等飛行兵曹、本日付を持って練習航空隊より、神海基地戦闘機隊へ転属となりました。」

その言葉に再び驚く五十六。

「君・・・もう卒業したの!？」

「はい。沢村司令代行のお墨付きです。」

義勇航空隊では、パイロットの不足からこちらの世界での人間の登用を始めていた。そのため、練習機をこちらにもちこんで訓練にあたっているが、沢村の言では投入までに最低4ヶ月はかかると報告されていた。

しかし、真理奈はまだ2ヶ月経っていないはずである。これは五十六の3ヶ月よりも早い。

「君の飲み込みが早くて、操縦も上手いとは思っていたけど、もう前線に出てこられる程の腕になっているなんて、信じられないよ。」

そうばやきつつ、彼は返礼をして彼女の着任を認めた。

翌日から、新たに真理奈を含めた編成での訓練が始まった。こち

らの世界でも、規模こそ小さいが、ガソリンの精製は始まっていたので、彼らが燃料に苦勞するという事はなかった。

そしてこの飛行訓練で五十六を含む隊員達は、真理奈の腕に舌を巻いた。飛行機に乗り始めて1カ月半。飛行時間にして200時間ほどしかない彼女は、零戦であらゆる動作を行なう事が出来た。さらに、対戦闘機訓練でも抜群の成績を記録した。

部下の1人である児玉一飛曹に至っては。

「彼女は女の皮を被った化け物です。」

と言つて彼女を評した。ちなみに、この言葉は数時間後に真理奈の耳に入り、彼はボコボコにされている。

まさに口は災いの元であった。

そんな穏やかな日常の中でも時は動いていく。真理奈が着任した1週間後、基地にレーダーが取り付けられた。アルメディア軍が航空戦力を持ったことへの対抗である。

あまり知られていないが、第一次大戦中すでにドイツやイギリス、ロシアはすでに単位での爆弾搭載を可能にした重爆撃機を作り上げている。この内、ドイツは後の第二次大戦と同じくロンドン空襲に投入している。

この世界で戦闘機が出現したという事は、それら重爆撃機が早々と出現する可能性もなくなかった。

もちろん、それらを撃墜するのは零戦を使わなくても、T6テキ

サン改造の偵察機でも可能である。しかし、それは悪魔で空中における話だ。

地上に置かれている飛行機ほど弱い存在は無い。もし夜間に奇襲爆撃でも受けたらそれこそ破壊されかねない。

これまで義勇空軍では、敵が飛行機を持っていなかったことから、レーダーも対空火器も持っていなかったが、今回早々と整備されたのである。

レーダーは初歩的な物であるが、それでもこの世界でなら充分すぎるほどの性能を持っている。

また対空火器は、携帯式の地対空ミサイルと対空機銃を配備している。

地対空ミサイルは本来、現代の空を飛んでいる戦闘ヘリやジェット機を落とすように作られている。そのため、この時代の初歩的な航空機では布で出来ているので、反射電波を拾えない可能性がある。

そのため今回配置されたミサイルは熱線探知式である。ただし、感知温度を下げた特製品である。

そうした変化があったが、しばらくは哨戒任務に出撃しても接敵することはなかった。

平穏が破られたのは真理奈が来て2週間たった日であった。その日の朝、レーダーが国境線方向から接近する30機あまりの編隊を捉えた。

ただちに基地中に空襲警報が出され、五十六を始めとするパイロット達が愛機に走った。

「コンタックー!!」

各機はエンジンを掛けると、暖機運転もそこに滑走を開始した。五十六も直ぐに機体を発進させた。

現在神海基地に配備されている、零戦4機、テキサン2機の全機が緊急発進した。

「こちら高野。レーダ室。敵の位置、速度、機数を知らせ!」

五十六は無線でレーダ室に問い掛けた。

「レーダ室より上空の全機へ、敵機は旧国境線方向約40km。対地速度100km。機数は大小30機。」

約40kmの距離で、100kmで迫っているという事は20分ちよつとで到達する事となる。飛行機は全機発進したが、まだ基地には燃料や修理用部品など破壊されてはならない物資が山積みになっている。空襲を許すわけには行かない。

「高野より全機へ、高度3000まで上昇して敵機へ迎撃を行なう!」

「了解!!」

6機は敵編隊へ向かった。そして数分もすると、高度1500m程に大小の飛行機が編隊を組んで飛んでいるのが見えてきた。

「大型機10に、小型機20って所だな。」

編隊を見て概算する五十六。小型機は先日戦ったニューポールのようだ。そして、大型機は、写真でしか見たことないが、ドイツのツェッペリン・シュターケンそっくりであった。

敵機はまだこちらを発見できていない様で、編隊に動きは見られない。

「全機へ、敵はまだこちらに気付いていない。小隊ごとで、大型機に集中攻撃だ!!」

「了解!!」

小隊は五十六と松内一飛曹が率いる戦闘機小隊と、大河率いる偵察機小隊の3つである。そして五十六の小隊の2番機は。

「姫神二飛曹、行くぞ!機銃の装填がしてあるか確認せよ!!」

「わかっています!!」

真理奈であった。今回初陣の彼女であるが、彼女の声に戦闘に対する怯えなどは聞こえなかった。

「ようし、全機突撃!!」

迎撃戦 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1977d/>

異空間戦記 救国の英雄たち

2010年10月11日11時37分発行